

「生死一大事血脈抄」講義

信心の骨髓明かす一書

本抄は、恩師戸田先生が何度も講義してくださった懐かしい御書であります。

戸田先生は「この生死一大事血脉抄を読むのは、とても面倒です。スラスラ読んでわかったとも思うが、またわからなくなってくる。境涯が深まるたびに、読み方が深まってくる」という意味のことを、何回となく語っておられた。

また戸田先生は「日蓮門下にとって信心の骨髓の御書であり、これを離れて広宣流布もなければ信心の核心、仏法の骨髓にふれることはできない」とまでいわれていました。そして、また「地涌の菩薩の実践の明鏡ともいふべき書である」とも述べられておりました。

私も、文証、理証、現証のうえから、それを確信しております。また、私自身、種々の会合で、再三再四、講義をし、思索を重ねてもまいりました。そのたびごとに一節一節の凝縮された内容に驚き

もし、感激を新たにしていまいりました。まことに不思議な一書としかいいようがありません。

今回は、「教学の年」の意義にもちなんで、本抄をめぐるこれまでの思索の集大成として発表しておきます。これもひとえに未来の広宣流布への展望のうえから、本抄によって仏法の原点を深く掘り下げ、信心の血脈という源流を確認しておきたいと願うからであります。

本抄は比較的短い御書であります。じつはたいへん深い内容を含んでおります。「生死一大事の血脈」という仏法の究極の課題をただちに取り上げておられるゆえであります。この課題こそ、釈尊をはじめ仏法三千年の歴史に登場した実践の人々が、^{えいち}叡智の限りを尽くし、情熱のすべてをそそいで考察し、体得しようとして取り組んだ一点であります。

八万四千の法蔵も、また大地微塵^{みじん}ほどの論釈も、そのことごとくが、この「生死」という一つのモチーフをめぐって展開されたものといえます。

最蓮房^{さいれんぼう}は、当時の仏法哲理の最高峰に位置してきた天台の学僧であったゆえ、鋭くこの哲学的課題の原点に迫り、日蓮大聖人の教えを仰いだのであります。本抄は、日蓮大聖人がこのテーマに対して、末法御本仏としての観心の立場から結論を与えられ、さらに一切衆生の成仏のための実践論を明示された御書です。

「諸法実相抄」が、広く諸法と実相、十界と妙法、凡夫と仏という総体的課題を論じ「日蓮と同意」に妙法流布に立ちゆく地涌の菩薩の使命を教えられたのに対し、本抄は、正しく成仏、不成仏という仏道修行の根本目的を論じられ、その成仏への血脈がいかなる実践のなかに流れ通うかを明かされた

御書でもあります。

また「諸法実相抄」が、人本尊開顯かいけんの「開目抄」と、法本尊開顯かんじんのはんぜんしやうの「観心本尊抄」の両書の内容を含んだ御著作であることは、その講義のなかでふれておきましたが、本抄は、御本仏日蓮大聖人御証得の法門自体を明かされたともいえる重書であります。まさしく「境涯の書」というべきでありましょうか。日蓮大聖人御内証の法門をしたためられた書であるゆえに、何回も拝読し、わが生命に刻んでいっていただきたいことを、まず最初に申し上げておきたいのであります。

本抄は、文永九年二月十一日、佐渡・塚原つかはらにおいてしたためられた書であります。対告衆たいどうしゆは「諸法実相抄」と同じく、最蓮房日淨にちじやうです。この人については「諸法実相抄」講義に述べたとおりです。で、対告衆についての解説は略させていただきます。

もとよりこれは御消息文であり、題号の「生死一大事血脈抄」は後世に付されたものでありますが、冒頭ぼうとうから「夫れ生死一大事血脈とは……」と説き起こされておりますゆえに、まず、この「生死一大事血脈」ということから述べていききたいと思います。

「生死」とは、生まれては死に、死んではまた生まれてくる、すなわち生死を繰り返すこの生命をいいます。

「一大事」とは、もともと根本の肝要という意味であります。「二」とは、たくさんあるなかの一つということではなく、これ一つ以外にないという意味の「一」であります。その唯一無二ゆいいつむにの根本の大事ということが「一大事」なのです。

したがって「生死一大事」とは、生命における最重要の大事ということであり、生命の極底ごくていの法をさすのであります。

「血脈」とは、師匠から弟子へ法が伝えられることを、人間の身体の中で血脈が絶えることなくつらなっていることにたとえていわれたものであります。

仏法における師弟の関係は、師としての仏が覚知した生命の極理を、そのまま弟子の生命に伝えることにあります。ゆえに、師がみずからの悟さとった法を、そのまま弟子に伝えていくことを「血脈」と称するのであります。

したがって「生死一大事血脈」ということを一言に要約して述べれば、生命の究極の法がいかにして仏から衆生に伝えられ、生死を繰り返す衆生の生命に顕現されていくか、ということでもあります。これこそ仏法のもっとも肝要であり、たんなる観念ではどうしようもない、実践の哲理、感応かんのうの哲理たるゆえんがここにあるわけであります。

「生」は顕在化「死」は潜在化

以上、概説しましたが「生死」「一大事」ということについて、少々私の考えるところを述べてみたい。なお血脈については、本文に入って詳細に論じてまいります。

まず「生死」とは、生と死ということであり、大きく二つの意味があります。一つは、生老病死の

四苦を略して「生死」といい、苦しみをあらわす場合と、いま一つは、永遠の生命観に立って、生まれては死に、死んではまた生まれでくるという、生死を繰り返す当体をあらわす場合とであります。

ここでの「生死」は、いうまでもなく生命を意味しているのであります。生と死は、生命の変化の姿であり、逆にいえば、生と死にしか生命はあらわれないのであります。

凡夫の眼には、生命は生で始まり、死で終わるとしか映らない。しかし、仏法の視点は、この限界を打ち破って、生とあらわれ、死として持続している全体を貫く「生命」そのものをとらえたのであります。

この観点から、仏法では、生命の変化相としての生と死を、どうとらえているのでしょうか。

法華經壽量品に「若退若出」——もしは退き、もしは出ずる、と説かれております。（正しくは「生

死の、若しは退、若しは出有ること無し」と説かれている）この「退く」というのが「死」にあたり、「出ずる」というのが「生」にあたります。また壽量品では、永遠の生命観から、生命は、退いたり、生じたり、生まれたり、死んだりするものではない、という説き方をしておりますが、日蓮大聖人の

「御義口伝」では、さらに深く本有の生死、つまり本来もとの生死であり、退出（退く、出ずる）ととらえるのが、ほんとうの正しい生命観であると説き明かしております。

ゆえに、生命が顕在化した状態を「生」とし、潜在化した状態を「死」ととらえ、しかも、その生死を無限に持続しているのが、生命そのものなのであります。

生を顕在化、死を潜在化ととらえる仏法の究極の哲理は、なんと、悠久、偉大な生命をみてとって

いることでしょうか。

しかも、その生と死は不二であると説いているのです。生を働かしているものは潜在化した妙なる力であり、また、潜在化した生命は、やがて縁にふれて顕在化し、ダイナミックな生を営み、色彩豊かに個性を発揮していきます。やがて、その生は静かに退き、死へとおもむく。しかし、その潜在化は新しいエネルギーを蓄えつつ、新しいつぎの生を待つのであります。

いわば、生は、それまで休息し、蓄えた生命の力の爆発であり、燃焼であり、やがてその生涯の一卷の書を綴り終えて、死におもむく。その、宇宙それ自体に冥伏し、潜在化した生命は、宇宙生命の力をそこに充電させながら、生への飛翔を待つのであります。

これが、本来の生死であり、この宇宙本然のリズムの根源が、南無妙法蓮華経であります。ところが、その本然のリズムとの波長が合わず、偏向性をおびた生命は、その生死の繰り返しの中に、主として地獄、餓鬼、畜生界等に偏りつつ、ぎごちない運命をたどっていきます。いわゆる宿業といわれるものが、それであり、重々しい鉄鎖にしばられつつ生まれ、また死んでいくのであります。

この偏向した生死を、本有の生死へと転換していくものはなにか。まさしく、それは、南無妙法蓮華経の一法に帰し、その一法から発していくしかないのであります。

一瞬に永遠が凝縮

なお、これは生死を三世という巨視の眼でとらえたものでありますが、私どもは瞬間瞬間にも生死を繰り返しつつ、一生という、より大きな生死を形成しており、小さな生命の生死が大きな生命の生死を支えていることも、知らなければならないと思うのであります。

空間的な尺度で生死をみていった場合でも、たとえば星雲が生々流転を遂げるのは、個々の星の成住壞空の集積であり、その星も、さまざまな生物や山河の生死のうえに、その一生をつくりゆくのであります。

人間の一生をみても、生まれたときに受けた色法を、最後までたもつのではない。大部分の細胞は、生まれては死に、生まれては死んでいく。その生死が新陳代謝をして身体へ若々しい活力を与え、全体としての生命を支えていくのであります。またわれわれの生命に生死が同居している場合もあります。たとえば、爪や髪は非情であります。死といってもよい。その根源は生でありましょう。生から死への移行は水の流れるごとく自然であり、また新しい髪や爪が伸びてくる。この生死の累積が一個の生命となるのです。

このように、生命は個別的、無統一的に存在するのではなく、重層的、統一的存在であり、小さな生命がより大きな生命を形成し、小さな生死の支流が大きな生死の流れに注ぎ込んでいき、やがては宇宙生命という大海に流入していくのであります。生命というものの不思議さを感じざるをえない。

また、時間的な眼でみれば、一瞬一瞬、私どもは生死を体験しているといえる。いまこの一瞬の生命が地獄界であれば、地獄界が「生」で、他の九界は「死」の状態である。ところが病気で苦しんで

いたのが、病氣が治ったとする。うれしくてうれしくてしょうがない。天界です。そうすると、一瞬前の地獄界は、どこにもない。地獄界の死であります。すなわち、地獄界は他の境界とともに死となり、そこには天界の生命が生きいきとあらわれる。病氣が治って、さあ、この歡喜を皆に伝えていこう、信心を教えてあげようというふうに変わっていけば、天界の死で、菩薩界の生というふうに移っていくでありましょう。

瞬間瞬間、十界のいずれかが生、他の九界は死となっており、つぎの瞬間には他の生死と変わっていく。その積み重ねとして一生があるのです。

このように瞬間に生死がそなわるのも、けっして天界が生るときに他の九界が「無」になっているということではない。冥伏^{みょうふく}しているからこそ、つぎの瞬間に「生」となってあらわれるのは、いうまでもないことであります。

したがって、生死といっても、現在の一瞬をどう生きるかの積み重ねであります。永遠も一瞬の連続であり、一瞬に永遠が凝縮されてくる。瞬間の一念が生死の根源となっていくのであり、大きくは宿命転換の原理もそこにあると考察できるのであります。

現在の一瞬を大切にし、立派に生を輝かせ、さわやかにつぎの一瞬の生へと移っていけば、還滅門^{げんめつもん}の生死となり、六道のなかを、暗き生死から暗き生死へと落ち込んでいく生死は、流転門^{りゅうてんもん}の生死であります。そのゆえにこそ、生死の二法を貫く南無妙法蓮華經の仏法によって、一瞬を永遠に生きる生死の転換が必要となってくるのであります。

一大事とは生命の究極

つぎに「いまだいじ一大事」とは、究極ということであります。

この一大事ということの意義に関して、「御義口伝」には「ゆい いまだいじ いんねん唯以一大事因縁」をめぐって詳しく述べられていきますので、参照しておきたいと思います。

まず、一大事の「一」とは、もっとも根本の肝要という意味であります。「一」とは、三、五、七といった数字に相對していわれる「一」ではなく、絶対的な意味における「一」であります。いいかえれば、これ一つ以外にはないという意味の「一」であります。

また「大」とは、根本唯一の法、すなわち妙法は、人間生命のみならず、宇宙森羅万象のいっさいを貫いていることを意味しています。小は微細な微塵みじんから、大は大宇宙の運行にいたるまで、妙法のあらわれである。

この妙法が万法の根源として普遍的な広がりをもっていることを「大」といったのであります。さらに、宇宙と生命の根源である妙法蓮華経は観念ではなく、事実の活動それ自体であります。私たちが生命活動を営んでいるのも、また、春夏秋冬の四季がめぐるのも、すべて妙法蓮華経である。この厳然たる事実としてあらわれていることを「事」というのであります。

この「一大事」とは、また、空仮中の円融三諦くうけちゆう えんゆうさんたいにも開かれます。

「御義口伝」には「一とは中諦・大とは空諦・事とは仮諦なり此の円融の三諦は何物ぞ所謂南無妙法蓮華經是なり」（御書全集七一七頁）とあります。

「一」とは、妙法それ自体をさし、中道となります。

「大」とは、宇宙と生命の根源たる一法が、普遍的に万象をつつみこむ虚空のごとき雄大な広がりをもつことをあらわすゆえに空諦となり、「事」とは、根源の一法といっても、具体的に事実のうえで千変万化する万物のうえに顕現するのであり、仮諦となるのであります。

しよせん、「一大事」とは円融三諦の南無妙法蓮華經になるのです。

すなわち、南無妙法蓮華經とは宇宙と生命の根源であると同時に、全宇宙の森羅万象をことごとく包含する。そして、それは、けっして觀念でも、抽象でも、茫漠としたものでもない。現実のうえに具体的な姿をもってあらわれるのであり、この生命の融通無礙な実相を「一大事」というのであります。

さらに、「御義口伝」には「一とは一念・大とは三千なり此の三千ときたるは事の因縁なり」（御書全集七一七頁）とも説かれています。

「一」たる一念を、「大」たる三千万法に、事実のうえに作動させる根本の力を「事」というのであります。この事の一念三千を「一大事」というのです。しよせん、妙法の電源体ともいうべき御本尊こそ、一大事であるとおおせられているのであります。

妙法は久遠以来の血脈

御状委細披見せしめ候い畢んぬ

最蓮房、あなたからのお手紙は委しく読ませていただきました、ということです。

ところは佐渡流罪の地であります。客観的には厳しい不自由の地にありながら、日蓮大聖人は、門下一人ひとりの便りを逐一御覽になられ、全生命をかけた指導をされていらっしゃるわけでありま
す。まさしく佐渡の流罪地をも、日蓮大聖人は激闘の地とされ、仏法実践の道場としきっておられる
のであります。

御本仏日蓮大聖人の広大な御境界のまえには、なにものも妨げとなりえない事実を、この一節から
私は実感するのであります。

夫れ生死一大事血脈とは所謂妙法蓮華經是なり

「生死一大事血脈」とは妙法蓮華經、南無妙法蓮華經そのものである、と、まず結論を明示されておられます。

本来、生死一大事血脈とは、天台仏法で論じられた法門であり、それがいったいなんであるかを、最蓮房は大聖人にご質問したのでありましょう。冒頭に「御状委細披見」とおおせられているのは、最蓮房が天台学僧として学んだこと、そして、それが結局、どういうことかわからなくなってしまった経緯などが、縷々述べられてあったにちがいありません。

そうした繁雑な論議に対して、大聖人は一言のもとにこの奥義を明かし、迷妄を打ち破っておられるのであります。

結論だけみれば簡単なようですが、そこにいたる過程は、たいへんな哲理を経なければならぬ。それを、以下に示されていくのであります。

其の故は釈迦多宝の二仏宝塔の中にして上行菩薩に譲り給いて此の妙法蓮華經の五字過去遠劫より已来寸時も離れざる血脈なり

なぜ妙法蓮華經をもって「生死一大事血脈」の体とされるか。その理由の第一は、法華經の儀式において末法に流布すべき法体として説かれたのが妙法蓮華經である。そして、この付嘱を受けて末法

に弘通する上行菩薩にとって、久遠本地の生命が妙法蓮華經であるとのおおせです。

したがって、この御文は「釈迦多宝の二仏宝塔の中にして上行菩薩に譲り給いて」が一往の教相の立場であり、「過去遠遠劫より已来このかた寸時も離れざる血脈なり」が再往の觀心の立場という、二重の構造になっているわけであります。

上行菩薩は、一往文上の辺では、法華經の虚空会こくうえで釈迦、多宝の二仏から妙法蓮華經を譲り受けるという儀式をふみます。しかし、再往文底からみれば、上行菩薩の本地は久遠元初の自受用報身如来じじゅうほうしんにょらいです。本来、妙法の大地に住し、人法体一である、もっとも根本の仏なのであります。ゆえに「過去遠遠劫より已来寸時も離れざる血脈」なのです。

むささんじん無作三身如来の内に脈打っているその生命こそ、妙法蓮華經——南無妙法蓮華經にほかならないのであります。

「妙は死、法は生」と解明

妙は死法は生なり此の生死の二法が十界の当体なり

つぎに、総じて十界の一切衆生、いいかえれば私ども凡夫の、この生命の根源の体——すなわち、

われわれの「生死一大事血脈」もまた、妙法蓮華經にほかならないことを示されるのであります。

「妙は死法は生なり」とは、生死の二法は即妙法なり、ということです。生まれる、死んでいく、この生死という生命のあらわす姿は、そのまま妙法なのです。

生まれては死んでいくこの現実の生命をはなれて、別に妙法があるのではない。この生命自体が妙法です。そして、この生死の二法を現ずる妙法の生命がまた、十界の当体でもあります。

つぎになぜ「妙」を死、「法」を生とされるかといいますと、死の状態にある生命を、私どもは思議することができません。どこに、どのようにして存在しているのか。宇宙のなかに溶け込んで存在しているのだときかされても、容易に理解しがたいことであります。ゆえに、死が「妙」になるのです。「妙」とは不可思議ということです。

これに対して、生きている状態というのは、さまざまな働き、形、姿をもってあらわれます。しかも、その働きは、十如是の法によって示されるように、法則性をもっています。長いあいだ、食事をとっていなければ、なにか食べる物が欲しくてたまらないという餓鬼界の状態を示します。人にバカにされればハラが立つ。当然の、生命の法則です。したがって、生は「法」になるわけです。

「法」という漢字は「サンズイ」に「去る」と書く。水が流れるという意味になる。水は平らかで悠久であり、公平にして全宇宙に普遍的な意味をもっており、「去る」は久遠の過去から永劫えいごうの未来への流れを象徴しているかのようにあります。また、悪を去らしめるための存在という意味を含んでいるとの古文書もあります。

山深き溪流からほとばしる飛沫も、とうとうたる大河のうねりも、瞬時としてとどまることなく、上流から下流へ、そして大海へと、注ぎ込んでいく。仏法の眼は、起きては滅し、隠れては顕れる森羅三千の現象を、因果の法でとらえております。したがって、事物の流れのなかで「法」をみているということになる。静止した、抽象的な法をみるのではないのであります。そのゆえに、法を水の流に象徴してとらえたのでありましょう。現実生活に即し、生命の実感のなかに法はある。「諸法」を現象と訳すのはそのゆえであります。

一般的な感覚からいえば「法」はむしろ「死」ととらえられるかもしれない。万有引力の法則とか、相対性原理であるとか、経済学の法則という「法」は、現実的な生活における事象を総合、抽象化したものであり、それ自体は外にあらわれないものと考えるからであります。

しかし、仏法における考え方は、現象に即して法をとらえているところに特質があり、また抽象的で現実から遊離した哲学に陥るのではなく、生活法として定着していくゆえんもここにあるのであります。この考え方に立ったとき「法は生なり」というおおせが明らかになってくると思う。

さて、この「現象」そのものをみるだけでは、なんら他の学問と変わるところはない。川の流れを調べるのは科学の分野であります。川の流れを起こしている根源の力を知ることこそ、宗教の意義がある。その根源の力は、けっして現象から遊離したものではない。しかし、姿や形としてとらえられるものでもありません。「思議」できないものであります。それを「妙」と表現したのであります。

又此れを当体蓮華とも云うなり、天台云く「まさ当に知るべしたしやう依正の因果は悉く是れ蓮華の法なり」と云云此の釈に依正と云うは生死なり生死之有れば因果又蓮華の法なる事明あきらけし

生死の二法をあらわして存在している十界の当体を「当体蓮華」ともいうのであります。生死が「妙法」で、それを現する体が当体の「蓮華」ですから、十界の生命は、そのまま「妙法蓮華」であります。

これを天台の法華ほつげけんぎ玄義の釈を引いて、その証文とされております。すなわち「依正の因果は悉く是れ蓮華の法なり」と。「依正の因果」とは、依報、正報によって成っているこの生命のあらわす因果、ということであります。すなわち、現実に存在する生命——いいかえれば、十界の衆生をいうのであります。

現実に存在する生命を、タテに時間の流れのなかでとらえれば、かならず生まれては死んでいきま
すから「生死の二法」になります。一方、ヨコに空間的な広がり
のなかでとらえれば、依報、正報のかかりあいとなります。ゆえに、大聖人は、天台の場合は、ヨコに依正としてとらえているけれども、それはタテに生死としてとらえてもまったく同じであるとして「此の釈に依正と云うは生死なり」といわれているのであります。

この依正とも生死ともとらえられる現実の生命は、因果の法をあらわしていく。そして、この生命

の因果の法はかならず「因果俱時^{ぐじ}」であって、したがって「蓮華の法」となるわけであります。

ここで「蓮華の法」「因果俱時」ということについて、申し上げておきたい。

蓮華は、華^{はな}と同時に実を生ずるところから、因と同時に果があるという原理を象徴することは、よく知られているとおりであります。

しかしながら、では因果俱時とは、いったい、いかなる場合をいうのか、という点を正しく理解しておく必要があります。通常の物理・化学的現象、あるいは社会的事象においては、原因と結果はかならず異時であります。

因果俱時とは、生命事象、それも法華経がはじめて明らかにしている生命の法に認められることなのです。「観心本尊抄」に、十界について述べられた御文があります。いわゆる「瞋^{いか}るは地獄・貪^{むさば}るは餓鬼・癡^{おろか}は畜生・諂^{てんこく}曲なるは修羅・喜ぶは天・平^{たいら}かなるは人なり」(御書全集二四一頁)等とおおせられているところであります。

これは「瞋^{いか}る」というその生命の働きが因であり、それが地獄界であるという果をもたらすというのである。しかし、瞋^{いか}るを起こして、のちにいつか地獄という果を生ずるといふのは爾前経の説き方です。法華経は、瞋^{いか}るにとらわれているそのときに、地獄という果を得ているといふのであります。これが因果俱時です。

この場合、瞋^{いか}るというのが正報の働きであるのに対し、その境涯が地獄界であるといふのは依報の面からとらえたことになります。正報が因で、依報が果であり、ゆえに天台は「依正^{えしやう}の因果」と表現

しているわけであります。

同様にして、妙法を信ずるということが因となって、その瞬間、仏界であるという果を生じているのです。ここに、成仏ということにおける因果俱時の原理があるのであります。

生死の二法は一心の妙用

伝教大師云く「生死の二法は一心の妙用・有無の二道は本覚の真徳」と文、天地・陰陽・日月・五星・地獄・乃至仏果・生死の二法に非ずと云うことなし、是くの如く生死も唯妙法蓮華經の生死なり、天台の止観に云く「起は是れ法性の起・滅は是れ法性の滅」云云、釈迦多宝の二仏も生死の二法なり

伝教大師は、天台法華宗牛頭法門要纂のなかに、こういつている。

——生まれるのも、死んでいくのも、一つの心のあらわすところの不可思議な働きである。この世界に生命として存在するのも、死んで、無の姿になるのも、仏のもともとの覚りのあらわす特質である——と。

ここで伝教大師のいつている「一心」とは、妙法蓮華經のことであります。また「本覚」とは、こ

の妙法を覚知した仏の境界をさします。生死の二法とは、生まれてくる、死んでいくという働き、変化をいいます。これに対して「有無の二道」とは、この世に有る、この世に無いということであり、存在の仕方をいいます。

あえていえば、生によって「有」となり、死によって「無」となるわけです。しかし、この「無」とは絶対無ではない。仏法では「空」の意味であります。

ともあれ、ともに妙法蓮華經のあらわすところの働きであり、妙法蓮華經のとり二つの存在の仕方といえます。このことは、逆にいうならば、万物は生死の二法、有無の二道を示していくけれども、その体は、常住不変の妙法蓮華經そのものであるということなのであります。

以上が、あくまでも、この御文の基本的把握となりますが、これをふまえて、信心、生活のうえに約して「生死の二法は一心の妙用・有無の二道は本覺の真徳」の文を論じてみたい。

「一心」とは信心の一念であり、御本尊と境智冥合し、南無妙法蓮華經と唱える私たちの一念であります。この妙法を信行する強い一念によって、生死の二法を支配しきっていけるということであり、す。生死の大海におぼれているわれわれの生命を、妙法によって確立するならば、その生死の大海を悠然と泳ぎきっていくことができるということです。また、有無という現象界も、妙法の一念を確立することによって、思う存分に乗りきっていけるということです。

私たちが「一心の妙用」によって生死の二法を転換するといっても、生死そのものがなくなるわけではない。不老不死の仙人のような存在になるのではないのです。あくまでも一介の市井の人として

の一生は、なんら変わることはない。しかし、暗きから暗きへと煩悶する生死ではなく、本有の生死を樂しんでいけるのが、生死の二法を支配するということであります。

「御義口伝」にいわく「自身法性の大地を生死生死と転ぐり行くなり」（御書全集七二四頁）と。

私たちの三世にわたる人生は、車に乗って大地を生死、生死とめぐっていくようなものである。しかし、泥沼のなかや岩のゴロゴロした道をガタガタの車で苦しみながらめぐっていくのか、ハイウエーを軽快にさわやかに走っていくのか、そこに同じく生死といっても違いがある。前者が無常断滅の生死であり、後者が本有の生死であります。私たちは本有の生死を送っていくことができる。それが一心の妙用なのであります。そのためにまず、勤行の実践が必要となってくるのであります。

すなわち、実践的立場からいえば、いかなる生死の二法を現出し、いかなる有無の二道を歩みゆくかを確かに決定づけるものこそ、自身の妙法への一念の姿勢いかなであり、御本尊への信の強弱です。現象の世界には現象の世界の法があり、因果律があることは当然であります。その生死、有無という現象世界にあらわれた自身の総体を、福德に満ちた当体へと回転させるか、暗やみの淵へと沈没させるか。その、いわば舵をとり、方向を与えるものこそ、自己の信心の一念であります。

「命已に一念にすぎざれば仏は一念随喜の功德と説き給へり」（御書全集四六六頁）と説かれるように、妙法にめぐりあって歓喜する一念、広宣流布という未曾有の仏事に喜び勇んで邁進していく信心実践のなかに、無量の功德が開かれ、人間としての勝利の人生が開かれていくことを知るべきであります。勇んでなす一念と、受け身の一念と、その差はほんのわずかですが、結果としては、現実

世界において莫大な開きとなつてあらわれるのであります。

「天地・陰陽・日月・五星・地獄・乃至仏果」うんぬんとは、この世界に存在するあらゆる存在も、この世界が刻々とあらわしゆく変化相も、生死の二法を現じないものはない、ということです。天と地、すなわち私どもの生きているこの大地も、限りなく広がる宇宙の空間も、やはり生死の二法をあらわしています。太陽や月も、生じ、やがて死滅していくのです。

五星とは、現代的に言えば、地球と同じく太陽の周りをまわっている兄弟の星たち、いわゆる太陽系の惑星です。歳星、熒惑星、太白星、辰星、鎮星を五星といい、「立正安国論」では五緯という呼び名を用いられております。

太陽に近いほうからいえば、水星にあたるのが辰星、金星が太白星、火星が熒惑星、木星が歳星、土星が鎮星です。今日、天体望遠鏡によってその存在を知られている天王星、海王星、冥王星は、當時は知られていなかったもので、でてこないのです。

ともかく、こうした万物、万象の体が妙法蓮華経ですから、これら万物の示す生死は、しよせん妙法蓮華経の生死なのです。

天台大師が摩訶止観に「起は是れ法性の起・滅は是れ法性の滅」といつているのも、まったく同じ意味であります。法性とは妙法蓮華経ということですが。森羅万象の起、滅——すなわち顕れてくるのも、滅していくのも、すべて妙法蓮華経の起滅にはかならない、との意であります。

「釈迦多宝の二仏も生死の二法なり」——釈迦は生をあらわし、多宝は死をあらわしております。法

華經の虚空会こくうかいの儀式において、宝塔の中に座している釈迦、多宝の二仏自体、生死の二法をあらわしているのだとおおせであります。

境智の二法に約せば、釈迦は智、多宝は境であります。ゆえに、能動的主体の智の表象にあたる釈迦は生、所証の境の表象である多宝は死となるのです。

大聖人の弟子檀那の肝要

然しかれば久遠実成くおんじつじょうの釈尊かいじょうぶつどうと皆成仏道の法華經と我等衆生との三つ全く差別無しと解とくりて妙法蓮華經と唱え奉る処ところを生死一大事の血脈とは云うなり、此の事ただ但日蓮が弟子檀那だんな等の肝要なり法華經たもを持つとは是なり

これまでのところをうけて、結局、いかにすれば、仏法の極理であり、仏の悟達ごだつの法であり、しかもわれわれの生命の体でもあるこの生死の一大事が、衆生のなかに脈々と湧現ゆげんしてくるか、という実践法を述べられるところであります。

ここでは、そのなかでももっとも根本となる、信心の姿勢をいわれていると考えるとよいでしょう。すなわち「久遠実成の釈尊」——これは本果の立場の仏であります。久遠実成の釈尊自身の生命の体

も「妙法蓮華經」である。

「皆成仏道の法華經」については、この本果の仏が己心の悟達をそのままに説いた法であり、十界の衆生は皆、この法を信受することによって、己心の妙法を覚知し、成仏することができる。この「皆成仏道の法華經」の体もまた「妙法蓮華經」にほかなりません。

「我等衆生」もまた「天地・陰陽・日月・五星・地獄・乃至仏果・生死の二法に非ずと云うことなし」とお示しの個所に対応しております。凡夫である「我等衆生」の体もまた「妙法蓮華經」であることを、明確に教示されたところであります。

したがって、この「久遠実成の釈尊と皆成仏道の法華經と我等衆生との三つ」という表現は、一往、法華經本門の五百塵点劫成道の釈尊と、二十八品の法華經と、「我等衆生」とみられましょうが、再往、元意の辺は、久遠元初の自受用報身如来即日蓮大聖人と、文底独一本門の大御本尊と、そして私どもの生命とがともに南無妙法蓮華經であり、この三つはまったく差別はないと「解りて」と拝すべきであります。これを、差別があると思っていくのは、真実の仏法ではありません。

仏は、すばらしい特別な存在であるとし、われわれ衆生は、卑しく醜い存在であって、とうてい仏になどなれるはずがないと考えるのは、大なる誤りであります。

また、法華經は、架空の儀式、説法であり、今日のわれわれの生活や人生とはまったく無縁のものであるとするのも、この御文のお心に背いているといわなければなりません。

いわんや、文底の立場で、日蓮大聖人とわれわれのあいだに、越えることのできない隔絶があるよ

うに考えたり、御本尊をよそにみていくこともまた、みずから「生死一大事の血脈」を途絶していることになるのであります。

しかしながら、この「三つ全く差別無しと解りて」といっても、それを事実のうえで「解る」——理解するということろまでは達していないのが凡夫であります。その場合「解りて」とはどういうことかといえは、「以信得入」「以信代慧」と示されるごとく「深く信心をとって」ということになるのであります。

ともかく、御本仏日蓮大聖人の御生命も南無妙法蓮華経であり、その大聖人の御生命をそのまま「すみにそめながしてかきて候」（御書全集一一二四頁）とおおせられている御本尊も南無妙法蓮華経である。

そして、もったいないことでありますが、私ども一人ひとりの生命もまた、同じ南無妙法蓮華経であると、こう信じて、南無妙法蓮華経と唱えるとき、私どもの生命に生死一大事の血脈、すなわち南無妙法蓮華経の大生命が脈々と湧現してくるのであります。

これこそが、日蓮大聖人の弟子檀那——すなわち日蓮大聖人の仏法を實踐する者にとっての肝要である。「法華経を持つとは是なり」——これ以外にないということなのであります。

「臨終只今にあり」と自覚

しよせんりんじゆうたいたい
所詮臨終只今にありと解りて信心を致して南無妙法蓮華經と唱うる人を「是人命終為千仏授
手・令不恐怖不墮惡趣」と説かれて候

「臨終只今にありと解りて」ということは、たんに肚を決めるというのではない。「解りて」とは、
事実がそのとおりであることを前提にし、この生命の眞実の姿を見極めるという意味であります。

だれしも、まだまだ、自分の人生は先があると思つてゐる。だが、いつ死がおそつてくるかは、だ
れも知らない。一瞬の後には死んでゐるかもしれないのです。これが、生命の眞実の姿です。

いわんや、かりにまだ二十年、三十年、あるいは五十年と寿命のあることが確かであるにしても、
永遠からみれば瞬時であるといわざるをえないであります。これもまた「臨終只今」です。

この事実を理解したとき、心ある人ならば、いま生きて仏法を受持してゐることの重みを、ひしひ
しと感ぜずにはいられないはずです。目先の榮華、今生の名聞名利は問題ではない。永劫の未來のた
め、死してなお消えることのない福運を積むため、眞実の人生の目的を凝視しながら、信心いぢずに
励まざるをえないであります。

これが、信心の究極の姿勢であります。といつて、では、仏法者であり、社会人であるわれわれ
も、文字どおり、いっさいをかなぐり捨てなければならぬかというところ、そうではありません。広宣
流布という大目的に向かつて、信行に励みゆくとき、すべてが妙法のもとに生きてくるのでありま

す。それが、私どもの「臨終只今にあり」と解^{きと}った生き方があります。

瞬間瞬間、この決意の持続に生きていくとき「千仏授手・令不恐怖不墮惡趣」^{せんぶつじゆしゅりょうふくふくふだあくしゆ}となるのです。千仏が手を授けてくれたように、安心立命の境地になり、地獄、餓鬼、畜生、修羅^{しゆら}などの惡趣に墮^おちることもなくなるのです。

「是人命終為千仏授手」^{ぜんにんみょうじゆうい}のこの文は、一往は一生の終わり、死の瞬間において、このようになるということでありますが、再往は、生きているあいだの、瞬間瞬間の境涯についていわれたものであることを知るべきであります。

「所詮臨終只今」^{りんじゆうただいま}ということは、只今に全生命をかけていくということにほかならない。日々を懸命に生きていく、広宣流布に、一生成仏へ、わが生命を燃焼させながら、戦いぬいていくということがあります。

一人の人に仏法対話をしていくにも、今を逃^{のが}したら、いつまたじっくり話せるかわからない、また、この人の宿命転換は今しかない、と真剣に接していくなれば、その人生はすでに臨終只今の精神に通じているのではないでしょうか。御本尊への唱題にあっても、教学を学ぶにしても、激励の手紙を書くにしても、一瞬一瞬、真剣に取り組んでいくことがなによりも大切なのです。

思うに一生といっても、現在の一瞬の積み重ねであります。きょうを充実させられない人に、あすの開花はありません。瞬間を大切にできない人がいくら百年の大計を口にしても、絵にかいた餅^{もち}にすぎない。過去の因も未来の果も、現在の一瞬の諸法実相に凝縮されているのであり、その一瞬の転換

が過去久遠よりの罪障の消滅も、未来に続きゆくであろう永劫の福運も決定していくものです。そのカギが「臨終只今」の信心を確立するかいなかにあるのだという、宿命転換の原理を教えられている御文と拝します。

この法華經勸発品第二十八の文を、文字どおりとった場合は、命終したとき千仏が手を授け、決して恐怖させることもなければ、三惡道、四惡趣に墮とさせることも絶対にないということです。

このように說かれているのは、死んで宇宙に溶け込んでいく生命は、もうみずからの意志ではいかんともできないからです。その人の生命状態そのまままで業果につつまれなければならぬ。絶対的な厳しさです。そのときに、千仏が手を授けて守護する。これほど力強いことはないにちがいない。

また、これはたんに手を授けられるということのみではなく、永遠の生命を確立できるということでもあります。永劫不壞の絶対的幸福をつかめるとおおせなのです。

もちろんそれも、臨終只今の信心の持続があつてこそであり、「心の固きに仮りて神の守り則ち強し」であることを忘れてはなりません。

御本尊への信と唱題もなくて、しぜんに千仏が守りにきてくれるということではないのです。ここは一往、命終した命、すなわち受け身の生命のゆえにこゝにいわれているのであり、根本精神は、あくまで自身が、唱題の行に励むことにより、自分自身の胸中にある千仏の守りをみずからあらわしていくということにあります。

「千仏」とは生命守護の働き

悦ばしい哉一仏二仏に非ず百仏二百仏に非ず千仏まで来迎し手を取り給はん事・歡喜の感涙押え難し

この文は、念仏を打ち破っているところです。念仏においては、念仏を称えて死んだならば、阿彌陀仏の使いとして観音、勢至の二菩薩が、雲に乗って迎えにくると説いている。それを信じていた大衆が多かったから、そのような幼稚な教えで民衆を欺いていた念仏に対する激しい憤りを含めていわれているのです。

一仏とか二仏というようなものではない。まして二菩薩などというのではない。千仏が手を授けて守るのである。ぜんぜん規模が違う。つまり、どんなに三惡道に墮ちる生命であっても、浮上させていくということです。

また「御義口伝」には「千仏とは千如の法門なり」（御書全集七八〇頁）とあります。すなわち、宇宙のあらゆる生命守護の働きが作動して、法華經の行者を守護するのであるという意味になります。

このように、百界千如といわれているのは、「法」の観点からとらえられているのであり、法の原

理にかなうならば、宇宙のさまざまな働きが、その人の生命を守るように働くということ。しかも、その働きを起こさせるのは、一人ひとりの生命力であります。したがって、法華經の精神は眞実の自立を説いているのです。

この「千仏来迎^{ちいぶく}」をさらに身近なものとしてとらえるとき、このようにも考えられます。すなわち「千仏まで来迎し……」とは、人が亡くなったときに葬式をしたり、あるいは追善回向^{えこう}をするわけですが、そのさい、故人を慕^{した}って多くの友人、知人が、題目を送ってくれるということ。生前、崇高な使命の道とともに歩み、苦しいときも、喜びのときも、嵐^{あらし}のときも、希望の春も、ともに進んできた同志は、多くの尊き同志から題目の回向を受けることができるのです。

信、不信の差異は厳然

法華不信の者は「其人命終入阿鼻獄^{ごにんみょうじゆうにゆうあびごく}」と説かれたれば・定めて獄卒^{ごくそつ}迎えに来て^{きた}て手をやり取り候はんずらん浅^{あさ}猿^{さる}浅^{あさ}猿^{さる}、十王は裁断し俱生神^{くしやうじん}は呵責^{かしやく}せんか

それに比べて法華經を信じない人は、法華經譬喩品^{ひゆほん}にあるとおり、命終したならば、地獄のなかでももっとも重い阿鼻地獄に墮^おちるのであり、千仏が手を授けるのではなくして、獄卒が手を取って迎

えるというのであります。お迎えが獄卒ではやりきれません。妙法を信ずるか、逆に敵対するかは、これだけの決定的な差を生みだすのです。

生きているあいだは、いくら権力をほしきままにしようが、富を蓄えていようが、名声を博していようが、命終したならば、いっさい関係ない。一個の赤裸々な人間です。懸衣翁、奪衣婆によつてはがされてしまう。その人がいかなる行いをしたかという「業」がそのままあらわれて、その果報を受けなければならぬのです。

その告発は俱生神がして、十王が審判するという。俱生神は人が生まれると俱に生ずる神であり、その人の善悪を、もろさず閻魔王に報告するという。いまでいえば検事です。十王は冥途の十人の王で、初七日から三周忌までしだいに裁断するといわれております。閻魔王もその一人であります。これは裁判官です。世間法や国法ではいい逃れできることもあろう。しかし、仏法では絶対にできない。俱生神——同生同名と考へてもいいのですが、生まれたときから監視しているのですから逃れようがありません。

これは仏法が生命の内奥の因果を教えているものであり、嘘が通じないことを示しているのです。一般に、地獄は譬え話であり、生きているあいだの行いを正させるために説かれたものであるとされております。地獄として絵画的に示されている話はそのとおりであるかもしれない。しかし事実はどうであろうと、そういう生命の境界があることは真実である。日々の生活のなかに身を裂かれるような苦しみを味わう等活地獄もあれば、周囲から圧しつぶされるような衆合地獄、身を焼かれる焦熱

地獄等、あらゆる苦しみが充満しているのは、悲しいが嚴然たる生命活動の事実です。

三世が変わらざる時の流れであるならば、死後においても、なんら違ふことはあるはずがない。生命自体が苦樂を受けなければならないのは理の当然でもありません。

懸衣翁や奪衣婆も、永遠の生命の厳しき因果觀からみるならば、あらゆる外見的な虚飾が、死後の生命においてはなんの役にも立たないこと、生命内奥の眞実のみの世界であることを教えているのであり、十王や俱生神も、一瞬一瞬の色心にわたる言動が、すべて業として刻印されていることを教えた、優れた譬えとして理解されるのであります。

この觀点からするならば、妙法への不信誹謗の行為は、自己自身の生命力を損減させる行為であり、やがては生命力をまったく失ってしまつて、繫縛不自在、すべてに縛られて身動きできない泥沼の生命になっていくのです。

いかに恐ろしいといつて阿鼻獄ほど恐ろしいことはない。その地獄のありさまを聞けば血を吐いて死ぬほどであるといわれております。これは地獄の恐ろしさをいったものであるとともに、生命内奥からの不幸は、外見のそれと違って、筆舌に尽くせないものがあるということでもあります。

生きていくということ自体が苦しい、氣力が衰えてくる、希望を失う——これほど哀しく惨めな人生はない。なにをしても、ぜんぶうまくいかない。「聖人御難事」に述べられている「始めは事なきやうにて終にほろびざるは候はず」(御書全集一一九〇頁)とはこのことです。

建物が、外から台風等によつて打撃をうけた場合はよくわかるし、また修理することもできる。し

かし、内から腐っていった場合は、一見してわからない。しかし、着実に崩れていくし、それを直すことはたいへんな困難です。

法華誹謗は、わが身の宮殿を、内部から腐らせていくようなものである。もっとも恐ろしい仕業であります。まさしく獄卒が迎えにきて手を取る恐ろしさに勝るとも劣らないであります。

ゆえに、いかなる苦しいことがあっても、悲しいことがあっても、御本尊からは絶対に離れてはならない。福德を消し、仏種を永く断じてしまうからです。

仏法では臨終という問題を重視している。臨終は、その人の一生の総決算であるとともに、未来世を踏みだす第一歩であるとみているからです。

諸法実相で、その死の瞬間に、一生の善悪の業績が一つも残さず、その相にあらわれる。怖いくらいです。少しのごまかしもきかない。臨終の明暗は、そのまま、今世の姿の諸法実相であり、未来を映しだす鏡であります。

「夫^{それ}以^もみれば日蓮幼少の時より仏法を学び候しが念願すらく人の寿命は無常なり、出る気は入る気を待つ事なし・風の前の露尚譬えにあら^なず、かしこきもはかなきも老いたるも若きも定め無き習いなり、されば先臨終の事を習うて後に他事を習うべし」(御書全集一四〇四頁)とは「妙法尼御前御返事」の一節です。

私は、真剣に、かけがえのない「今世の生」を生きんとする者のあり方を教えられた御文であると拝するのです。

識者も志向する仏法の精髓

「臨終」がなぜ大事かということについては、最近では、欧米でもいろいろな学者が、さまざまな角度からこの点について研究をしています。

シカゴ大学の精神科医学部の教授をしていたエリザベス・キューブラー・ロス女史は、プロテストントで、死後の生命を信じることはなかった方ですが、最近十一年間に一千人におよぶ患者の死に接するにつれて、どうしても死後の生命を信ぜざるをえなくなってきたと告白しています。

ロス女史は、死んだものと一度宣告された人が蘇生^{そせい}してから、その間になにが起きたかを詳細に語ってもらい、つぎのようにレポートしています。

——肉体的死の瞬間、彼らは物理的な肉体から抜けて浮遊する。彼らは、ベッドに寝ている自分自身の姿を見ることができ、種々の情景を識別できる。だれが部屋へ入ってきたか、どの医師が、どの看護婦が部屋にいたかをぜんぶ知っている。患者は、すでに生命兆候^{ちやうこう}がすべて失われているにもかかわらず、周囲にいる人たちの着物の色まで識別できた——。

このような現実の体験を、ロスに話したという。これは、一種の肉体離脱^{りだつ}体験である。

——また、死ぬときの最初の瞬間は、だれでも気持ちのよい状態になる。(苦痛の極限からのがれられたという意味で)しかし——つぎの瞬間以後が問題である。

たとえば、キリスト教では、天国と地獄を説くが、たしかに、そのような差がやってくる。しかし、キリスト教に述べられている「天国」と「地獄」の様相と、実際に死から蘇^{よみがえ}った人の体験とはまったく異なっている。（その人たちのなかに、キリスト教徒もいた）

死んだ後——生命兆候がなくなった後——彼らは、ひとつの光源をめざしていく。そのとき天国とか地獄といわれるような状態が訪れる。しかし、その状態は、生命の外側から訪れるのではない。彼らは自分の生を反省するように強要されるのである。

ちょうど、テレビの画像を見ているように、その人の眼前に、一生のことが現れては過ぎ去っていく。おこなった行為のみならず、思考の内容まで、走馬灯のように展開していく。

その人が生涯になしたこと、考えたことが、ことごとく見えるのであるから、ある人にとっては天国、また、他の人にとっては地獄を経験するといってもまちがいはない。

しかし、他者（たとえば、絶対神）が、その人を裁くのではない、その人自身が自分を裁くのである——という体験を、死から蘇った人は語るのである。

このような体験をふまえて、なしたことはけっして消えない、という仏法の業論^{ごうろん}は、すばらしい、美しい真理である。自分が種子のなかに注ぎ込んだものは、すべて、その人が刈^かり取るところのものである——私は、ほんとうに、それを信じる。それは、絶対的な法則である、とロスは述べております。

ロスの、仏法の業論への信は、彼女自身の患者と接した長い体験からくるものです。すべて、科学

的に確かめることができる、と彼女はいうのです。

ロスは、自分の考えが、仏法と一致していることを聞いてひじょうにうれしいと述べ「生きているうちにしたこと、悪いことが全部自分に返ってくるのだということを知ることが是非とも必要です」「もし、人びとがこういう体験を知っていたら、生きているうちに、もっと質の違った、高い人生を送りうるができるであろうと考えるからです」とも語っております。

こうした肉体離脱体験の一例として、ヘミングウェイも、ひどい怪我をしたときにみずからが経験したと、文学者らしい表現でつぎのようにいっています。

「わたしは、ちょうどひとが絹のハンカチの片隅をつまんでポケットからひっぱりだすように、自分の魂らしきものが、肉体からすいと出てくるのを感じた。それは飛びまわり、それから帰ってきて、再び体内に入り、そしてもうわたしは死んではいなかった」

彼は、この体験をそのまま「武器よさらば」で使っています。

評論家の松田道雄氏の編集した「死」と題する書のなかに、死の幻影をみたという体験があります。小林勝氏という作家の体験です。

長い体験記録なので、内容を要約しながら紹介してみましよう。

生死にかかわる手術をして、その後、麻酔が切れはじめたところから、その手記は始まっています。「十日の深夜から意識がもどってきたが、それと共に苦痛が来た。それは怒濤といってよかった。それに襲われると眼の前も頭の中も、真っ赤になった。血の色である」

「そして痛みの極みに達した時、私はすうっと飛びはじめたのを感じた。私はその時、私の姿をはっきり見た。私がこなごなに割れて、燃えつきた黒いかたまりになって、果てしない空間を、とてつもない速さで飛んでいくのである。私は地球を離れたと感じていた。(中略)私は空間を飛びながら、ああ、おれの地球はあたたかだった、と思っていた。

とてもつめたい。いっそうつめたいところへ飛んでいく。そして私の前方は無限の宇宙空間であり、うす青い色からしだいに濃い青へ、そして黒々とした色へとつづいていく。そうだ、このまま飛びつづけて、あそこへおちこんだ時(中略)これが死なんだ、と私ははっきり思った」

「そこにはもう、ただ一つのことを除いては、どのような人間感情も存在しなかった。(中略)私の親しい人々に対しても、また私自身についてすら、喜んだり悲しんだりするすべての感情はもはや消滅していた。これはいまにして思えば全く予期しないことであつた。親しい多くの人々と別れて、淋しいとかつらいとか悲しいとか、そういった感情はここにくると、もう存在しなかったのである。

ただ一つだけ、最後まで残っていた感情がある。それは、何とも云えない無念さであつた。こうやってついに生命に別れを告げるのか、という確認と同時に、かつて人間であり、ただ一度の生を生きたというその証拠を、自分がこうしてバタツと消えるにしても、やはりつづいていくであろう人間の歴史の上に、たとえどんなかな爪あとしとしてでも刻むことなくして飛び去らなくてはならないという無念さであつた。

これは、意外だった。自分なりに精いっぱい生きてきたつもりだったのに最後にそんなものが残る

とは夢にも思わなかった」

「生のまさに終えんとするそのどたん場で、はじめて愕然^{がくぜん}として云い知れぬ無念な思いを抱いて死に突入するほど、凝縮された絶望はほかにあるまいと思えるのである」

喜怒哀楽の感情さえも消えたあとで、ただ一つ残る無念さという感情——生命それ自体からわきあがる生命感でありましょう。

人類の歴史に貢献できなかったという無念さが、ひきかえすことのほとんど望みえない生と死の境で、死にゆく生命を凝縮された絶望に陥^{おとし}れる。この生命感の体験は、きわめて貴重であるように思うのです。

真実の生き方を凝視

つぎに哲学的な側面からは、生の哲学者ベルクソンも、身体と心の深い考察から、死後の生命を肯定するにいたっています。またアーノルド・トインビー博士は、不死の海である宇宙本源の「精神的實在」に帰ることが死であると信じ、一人の学者として、高等宗教、とくに、仏教の「空」に、生と死の解答を求めておられました。

「死という現象は、われわれが心身統一^{みか}体として見慣れている人間存在のうち、肉体面の分解をとまなうわけですが、しかしそれは「實在それ自体」からみれば、じつは人間の知的着想力の限界から生

じる幻想にすぎないことになります。(中略)私は、『实在それ自体』には時間もなければ空間もないと信じています。といって、それが時間と空間に束縛そくばくされたこの世界から、全く遊離まったくして存在するものだとは思っていません」

「生命は、はたして死後も存続するのか。また、肉体が無機物の世界へと還元かんげんされてしまった後、精神はどこへ行くのか。——要するに、これらの疑問は、空間とか時間の基準からは答えられず、空、ないし、永遠」の概念によって初めて答えられるのだと信じます」

さらに、死を見すえての生に関して、ガンで亡くなった作家の高見順氏は、その著「死の淵ふちより」のなかに「過去の空間」と題する詩を載せております。

「手ですくった砂が

痩やせ細った指のすきまから洩もれるように

時間がざらざらと私からこぼれる

残りすくない大事な時間が

.....

時間の洩れる音だけがいそがしく聞きこえてくる」

この詩には、残り少ない時間を愛惜あいせきしながら、永遠の生への限りない悲願がよみこまれています。時の一秒は、血の一滴よりも貴い——これが、この世に生をうけた人間の真実の生き方でありまし

う。しかし、人は、死をつきつけられるまでは、あまりにも、時をむだに過ごしているようです。

これもガンに倒れたある有能なルポ・ライターの話ですが、ガンと診断され、死期の迫りつつあることを宣告されてからというものは、その人はカレンダーを「日めくりのカレンダー」にかえたということです。残された貴重な一日一日を思えば、年間あるいは月間の月日がその他大勢といったふうには並べられているカレンダーを使うことは、とてもできなくなった。朝起き、昼を生き、夜になつて、一日が終わろうとするとき、その日の日付をいとおしむように破りとる、そして「ああ、今日一日も生命があったか」と、生の膚^{はだ}ざわりをしみじみと感じたというのです。

「人間は死への存在である」といったハイデッガーの言葉をまつまでもなく、生の底には死が流れています。いや、瞬間ごとに死に接し、死から生へと蘇^{よみがえ}っているといえます。

こうした死の自覚こそが、生を限りなく豊かにし、充実させるのです。死の自覚なきところに、真実の生もあります。充実した時間を送れるはずありません。ここに死はそのまま生の問題なのです。死を解決しないところに、生の確立もないといえるのではないのでしょうか。

四年前の春、トインビー博士から招請をうけ、第二回の対談のためロンドンに行き、五日間の対談を終え、パリに寄り、列車で二時間、平和な田園の詩情あふれるロワールの谷を訪れたときのことです。

緑の岸辺を洗う清流、牧羊の群れ、なだらかな丘陵、古城の尖塔^{せんとう}、小鳥がさえざる小径^{こみち}、深閑^{しんかん}とした森、咲き乱れる花、歳月を刻んだ石造りの農家……。そんなつた草におおわれた館^{やかた}の一つに、ルネ

サンスの巨匠レオナルド・ダ・ヴィンチが晩年を過ごした家がありました。ダ・ヴィンチがその偉大な生涯を閉じた寝室に、彼の言葉が銅板に刻まれていました。

「充実した生命は 長い

充実した日々は いい眠りを与える

充実した生命は 静寂な死せいじやくを与える」

スイスのC・G・ユングはっています。

「人生の半ばから先は、生きながら死ぬ覚悟のできている人だけが、本当に生き生きと生きているといえる」(「死の意味」)

ユングは、人生の後半をとくに重視してこの言葉をはいたのでしようが、人生そのものに、生きながら死ぬ覚悟もある面では必要かもしれません。その覚悟のある者のみが、真実の生きいきとした生を生きぬいたことになるということもいえるかもしれません。

トインビー博士はっています。

「生のさなかにわれわれは死のなかにいる。誕生の瞬間から、つねに人間にはいつ死ぬかわからない可能性はある。そしてこの可能性は、必然的におそかれ早かれ既成事実きせいじつになる。理想的には、すべての人間が人生の一瞬一瞬を、つぎの瞬間が最後の瞬間となるかのように生きなければならない」(「生きる」と死ぬこととのあいだの関係」と。

しかし、この理想状態で生きぬくことはむずかしい。——としながらも、トインビー博士は、つぎのように結論しています。

「確信をもって云いうるのは、人間がこの理想の精神状態を手に入れるところへ近づけば近づくほど、それだけ立派な、そして幸福な人間になるということである」と。

つぎに、この生と死の問題について、自然科学者の側からみた一つの眼を紹介してみましょう。大阪大学の名誉教授で物理学者の岡部金次郎博士は「人間は死んだらどうなるか」という著で、ユニークな見解を述べられています。岡部博士は、自然科学の法則を土台にしながら、そこから一步、推理を進めて死の問題を説こうとする。岡部氏の提唱する推理科学であります。

——物質の科学では、不生不滅の法則が成立する。つまり、エネルギーや物質が、なにも無いところから突然に出現したり、反対に現に存在するエネルギーや物質が、完全に跡形もなく消滅してしまうことはありえない。

人間の魂は、超物質的、超エネルギー的なもので、五感でとらえることはできない。

しかし、人間の魂なるものを認めなければ、人体を構成する物質は、新陳代謝によって、何年かのうちにぜんぶ入れ替わってしまうのであるから、現在の自分と子供のときの自分はまったく別人になってしまう。たんに、ある程度、形質が似ているだけということになる。

そこで、現在の自分と子供のときの自分との「自己同一性」を認めるとすれば、人間の魂なるものを認めざるをえないであろう。

魂のようなものも、それが存在するものとすれば、不生不滅の法則があてはまるであろう。つまり、死によって、人間生命が消滅してしまうのではない。なんらかの状態で存続するのであると推測せざるをえない。

魂の中心を魂の核と呼ぶ。生ときは、魂の核が肉体と一体不二であり、種々の機能を発揮している。つまり、活性状態にあると考えられる。死においては、魂の核が非活性状態になるのである。つまり、死の生命では、生きているときのような機能を発現することはない。しかし、生命のなかに、その人間としての機能を潜在^{せんざい}させているのである。

そして、生命が死から生へと蘇^{よみがえ}ると、再び、魂の核の機能を発揮するようになるであろう。

このように、人間の生死は、魂の核が活性状態であるか、非活性状態になっているかの違いであり、魂の核そのものは生死にわたって存続するのである——。(要旨)

岡部氏のいう魂、魂の核とは、通常の靈魂ではないと私は思う。靈魂という考え方は、仏法においても、涅槃経において、徹底的に否定されています。私は、氏のいつている魂の核とは、仏法における「自己同一性」をもたらし生命の「我」に通ずるものがあるように考えるのです。

ともあれ、人生においてなにが大事か。それは生きる目的観であり、生死の問題であり、この根本義をはずして、いかに他事に心を奪われても、しょせんそれはむなしい。なにも悲壯感にとらわれることはないが、死を見つめ、生を緊張して生きる、求道の嚴肅^{げんしゆく}な姿勢を失ってはならないのではないでしようか。

現代人は、そして現代文明は「生の奢り」に浸っているのではないか、と憂える識者の声もあります。死の重みを忘れた輕薄な生は、真の意味での生の充実をもたらさない。「臨終只今にあり」の言は、混迷の一途をたどる今日の時代において、千鈞の重みをもつものと、私は思います。

今日蓮が弟子檀那等・南無妙法蓮華經と唱えん程の者は・千仏の手を授け給はん事・譬えば蘇
夕顔の手を出すが如くと思し食せ

「是人命終為千仏授手」の法華經勸発品の文は、まさしく、末法の大白法を信受し実践する日蓮大聖人の弟子檀那にあたるのであるといわれております。ウリやユウガオの蔓がからむように、千仏が、御本尊を持つ私たちを、全力をあげて支えてくれるとのおおせであります。

このことを前提としたうえで、今度は指導者としてのあり方を考えてみたい。仏が衆生を守るのは、手をさしのべて、地獄へ墮とすまい、恐怖を味わすまいとする精神に立っているという法華經の文からするならば、私たちもまた、同志に対しても、また友人に対しても、この精神に立たなければならぬと思うのであります。

どうすれば皆が喜んで人生を満喫できるか、悲しい思いをしないでいけるかをつねに考えていくこと、すなわち同志愛、隣人愛、人類愛こそ、「令不恐怖不墮惡趣」の仏の精神であり、そのために手

をさしのべて協力し、励ましていくのが「千仏授手」であります。

人間、崩れるときもあれば、沈むときもあります。そのときにこそ、千仏、すなわち周囲の人々が励まし、支えあっていくなかに、その人自身の蘇生も、ひいては地域の発展もあると私は思う。またつねに私は、このことを念頭におきつつ接しているつもりであります。

現在の一念が洋々たる未来開く

過去に法華經の結縁強盛けちえんかうじょうなる故に現在に此の經を受持す、未来に仏果を成就じようじゆせん事うたがい疑有るべからず

心地觀經しんじかんぎように「過去の因を知らんと欲せば其の現在の果を見よ未来の果を知らんと欲せば其の現在の因を見よ」とあります。この文に照らしてみるならば、過去において御本尊への結縁が強盛であったというのは「過去の因」であります。現在に御本尊たもを持ったというのは「現在の果」となる。しかも、御本尊を受持していることは、そのまま「現在の因」であり、「未来に仏果を成就せん」すなわち「未来の果」を決定づけているのです。

私たちがいま御本尊を受持しているということは、また広宣流布、一生成仏をめざして実践してい

るといふことは、まことに不思議なことであります。それは過去にそれだけの因を積んでいたからにちがいない。「さいざいしよふつど じようよし ぐじよう在在諸仏土常与師俱生」の原理からするならば、つねに御本尊のもとに妙法弘通に挺

身してきた「因」のゆえでありましょう。そのゆえにいま、御本尊にあえたという「果」がある。

しかし、御本尊を受持できたということを、たんに「果」としてのみとらえるのではなく、その「果」をそのまま「因」としていつてこそ、つまり未来への発条はねとしていつてこそ、未来のさらに輝かしい開花があると知っていたいただきたいのであります。

「現在に此の経を受持す」の「受持」において、「受」とは過去の因による果でありましょう。しかして「持」とは、未来の果をめざしての因でなければならない。不断の精進、不屈の信仰の連続のなかに「持」の一字があると心得ていただきたい。「受くるは・やすく持たもつはかたし・さる間・成仏は持もつにあり」(御書全集一一三六頁)とあるのも、この意であります。

このように、過去の結縁が現在の受持とあらわれ、その現在の受持が未来の仏果となることは疑いないという、三世にわたる種熟脱しゅじゅくだつの原理を示されたのがこの文であります。それでは、現在において信心を起こすことのできない人は、過去に結縁がないのであって、そういう人は諦めるあきら以外にないのかというと、けっしてそうではありません。

現在のこの人生で仏法の話を書くことができたということも「過去の結縁」そのものになります。そして、人間は過去世の業によってのみ縛しばられ動かされていく存在ではなく、現在の一念によって、未来をどのようにでも変えていける主体的存在でもあります。厳密にいうならば、過去の結縁が強盛

であったかどうかは、だれにもわからないことである。ただ、現在の諸法実相が根本であり、もっとも大事なのです。「諸法実相抄」の「地涌の菩薩の出現に非ずんば唱へがたき題目なり」（御書全集一三六〇頁）と同じであります。地涌の菩薩だから唱えているのではない。題目を唱えているからこそ地涌の菩薩であるということです。

したがって、過去に日蓮大聖人の本眷属^{ほんけんぞく}として結縁強盛であり、さまざまな国土での妙法流布を誓いつつ、この世に生を受けてきたのだと決めて、現在の一瞬を真剣に行動し、この一瞬一瞬の積み重ねとしてのこの一生を、みずから切り開いていくことが、仏法の根本精神なのです。ですから、広宣流布に現実^{ていしん}に挺身していくことこそ、誓^{ちか}れある地涌の菩薩の証^{あかし}であるという強い決意をもって、日々の精進に取り組みたいと思います。

信仰の持続こそ最も大切

過去の生死・現在の生死・未来の生死・三世の生死に法華経を離れ切れざるを法華の血脉相承とは云うなり

さきに生死一大事の血脉について、妙法蓮華経であるとその体を明かされ、また妙法蓮華経と唱え

ることであるとその実践を示されましたが、ここではその持続のなかにこそ、血脈が連綿と受け継がれていくことを教えられているのであります。

いわゆる「血脈」には、唯授一人の別しての法体の血脈と、総じての信心の血脈とがあります。ここでおおせられているのは、総じての血脈であることはいうまでもありません。

この総じての血脈、すなわち久遠元初自受用報身如来たる日蓮大聖人の御一身に流れる生死一大事の血脈は、親から子へ血のつながるごとく、三世にわたって御本尊を持ち、題目を唱える私たちの生命に受け継がれていくのであるとの御文であります。

これは一往、大聖人の教えを受けるようになってから日の浅い最蓮房に、また、ともすれば理に走りがちなその傾向も感じられて、信仰の持続こそもっとも大切であることを教えられているのであります。

私たちの立場においては、仏の生命と感応道交かんのうどうこうできる生命の開発、すなわち信心のなかに血脈相承があるのであり、それには生涯、いな三世にわたる持続がなければならない。一生において、一つの信念を貫くことさえ容易ではない。しかるに三世にわたる信心を教えられているのは、簡単なことであるようにみえながら、これほど困難な、またこれほど大切なこともないと教えられていると拝したい。

大聖人の生命にある生死一大事の血脈を、私たちはどうすれば相承できるか。大聖人御自身はすでにおられません。だが、大聖人は人法一箇の当体たる御本尊を残してくださっております。ゆえに純

一な信仰による唱題という実践によって、大御本尊の生命をわが生命に移すのです。というよりも、わが生命のなかにある、大聖人の御生命、仏界の生命を湧現させる以外にないのです。

すなわち、大聖人の命を受けるとは、わが己心の大聖人を湧現させる以外のなにものでもない。空の鳥が御本尊であり、その鳥に呼応して鳴く籠かごの中の鳥が、わが生命の仏界であります。その意味では、信心の血脈相承といっても、いっさいわが生命にあるのであり、それを決定けつじょうさせるのは、したがってみずからの信仰以外にないといえるのであります。

謗法不信ほうぼうふしんの者は「即断一切世間仏種そくだんいつさいけんぶつしゆ」とて仏に成るべき種子を断絶するが故に生死一大事の血脈これ之無きなり

謗法、不信の者は、みずからの手で種子を断っているのであり、そのゆえに、謗法、不信の者に、生死一大事血脈があるうはずはないと述べられているのであります。

「一切世間の仏種を断ぜん」とは、どこの世界へ行っても救われない、どこへ逃げようとも逃げられないことではない。地獄の世界へ行くということでもあります。

あらゆる衆生の成仏の種子が南無妙法蓮華經であるがゆえに、妙法を信ぜず誹謗することは、一切世間の仏種を断ずることになるのであります。

仏法実践の究極は異体同心

総じて日蓮が弟子檀那等・自他彼此の心なく水魚の思を成して異体同心にして南無妙法蓮華經と唱え奉る処を生死一大事の血脈とは云うなり、然も今日蓮が弘通する処の所詮是なり、若し然らば広宣流布の大願も叶うべき者か

ここは異体同心の人間関係のなかに総じての生死一大事の血脈が流れ通うことを示されたところであり、広く一切衆生が仏に成る血脈を継ぐための具体的実践のあり方を明かされた御文であります。まず「総じて」と述べられていますが、これは、ごぞんじのように「別して」に対する言葉です。別して生死一大事の血脈が流れ通うところを尋ねれば、本抄のはじめに「釈迦多宝の二仏宝塔の中に於て上行菩薩に譲り給いて此の妙法蓮華經の五字過去遠劫より已来寸時も離れざる血脈なり」とありますように、文上においては、釈迦、多宝の二仏から付嘱を受けた上首上行菩薩の生命に、その血脈はある。

したがって再往、文底の立場から拝するならば、法華經文上に垂迹上行菩薩と現れた久遠元初自受用身如来の再誕たる日蓮大聖人の御生命こそが、別しての生死一大事の血脈の当体なのであります。

したがって、この御文は、日蓮大聖人の御生命に流れる血脈が、総じては大聖人門下の異体同心の団結の姿のなかにあらわれると結論づけられた個所なのであります。仏の血脈は、異体同心に題目を唱え、広宣流布をめざしてゆく一人ひとりの生命に脈打つとのおおせなのであります。

これは、末法の荒凡夫あらぼんばが成仏できる具体的な道を明かされた重要な依文えもんでもあります。

「今日蓮が弘通する処ところの所詮しよせん是なり」と述べられていますように、大聖人の妙法弘通の元意がんいは、空間的に広げれば全日本、全世界の人々に、また、時間的次元でいうならば、末法万年尽じんみらいさい未来際の人々に成仏の道を開き、仏の血脈を与えようとの大慈悲が、日蓮大聖人の根本の御精神であられるのであります。

ここに正法の伝持を主眼とした正像の授受しやうじゆのいき方と、全民衆の成仏をめざされた日蓮大聖人の末法折伏のいき方との根本的な相違点があるといえるのであります。

そうした大慈悲のお心から、成仏の根源の当体として大御本尊を御建立くださり、具体的実践、運動の方軌として異体同心の原理を教えてくださいましたのであります。

私どもは、この御遺命ゆいめいに照らし、御本尊を根本として日蓮正宗を外護し、異体同心に妙法流布に励み、人間同士の交流のなかで錬磨れんま、研鑽けんさんを重ねていくことを根本精神としているのであります。

恩師戸田城聖先生は、つねづね「創価学会の組織は戸田の命よりも大切である」といわれておりましたが、それも自他彼此じたひしの心なく異体同心の人間連帯の和を築いていくところに、総じての生死一大事の血脈が厳然と受け継がれ、一切衆生を仏になしゆくカギがあることを知悉ちしつしておられたがゆえで

あると確信するのであります。

一般的にみても、組織というものは、たんなる個の総和としての力をもつだけではない。異体同心の原理によって適材適所の構築がなされれば、想像を絶する力や働きが生みだされ、その組織の目的を成就していくものであります。人間の文化、伝統は、すべてこうした組織のなかにはぐくまれ、継承されているというのが否定しえない事実なのであります。

しかも、創価学会の組織は、個々の会員の人間革命、一生成仏をめざし、ひいては広宣流布をめざして生みだされたものであります。私どもは、戸田先生が遺されたこの創価学会の生命的連帯の組織を、なによりも大切にし、慈しみ、守りぬいていかなくはなりません。

なお、この御文に関連して、異体同心のあり方について、一言申し上げておきたい。というのも、異体同心の和合僧団にしてはじめて、総じての生死一大事の血脈が流れ通うとのおおせだからであります。

まず、異体同心を身近な例でいえば、広宣流布のためにつねに寄りあい、御書を学んだり、諸行事を企画したりして、互いに励ましあい、指導しあっていく事実の姿のなかに、その縮図があるといえる。「心ざしあらん諸人は一処いっしょにあつまりて御聴聞あるべし」(御書全集九五二頁)とも説かれているとおりです。

人間の心というものは、時々刻々と変化します。その変転きわまりない当体であるゆえに、集合し

ては信心の呼吸を合わせ、磐石^{はんじやく}な家庭建設のため、地域の繁栄のために離散し、再び仏法求道の座談の場に集いあうのであります。この繰り返しこそが、仏法の真髓を現じゆく事実上の方式であり、「異体同心なれば万事を成ず」との御文も、この姿をさすと拝せる。創価学会の今日があるのも、恩師戸田前会長を中心に、つねにこの異体を同心とする離合集散の実践が営々と持続されていたことに帰着するのであります。

私どもの信心の目的は、みずからの生命の連続革命にあるといつてよい。しかも、私どものめざす広宣流布は、利害や名誉を目的とした世間のそれとはまったく次元を異にする、もっとも崇高^{すうこう}な人類的、宇宙的、永遠的な普遍性をはらんだものであり、これを可能にする根本要因こそ異体同心の団結にあるということ強く申し上げておきたいのであります。

この異体同心の原理で大事な点は、まず第一に、異体を前提としていふことであります。一人ひとりの個性や立場、特性を最大限に尊重し、その当体を輝かせていくのが、日蓮大聖人の仏法なのであります。

「御義口伝」には「桜梅桃李^{おうばいとうり}の己己の当体を改めずして無作三身^{むささんじん}と開見す」（御書全集七八四頁）とおおせであります。この自体顕照^{じたいけんしやう}の姿をもって広宣流布に戦っていく、そこに自己の人間革命の軌跡^{きせき}があるのであります。

ややもすると、通常、組織集団というものは、異体を拒絶し、同体化をはかって統一したものをつくりだそうとするものであります。その端的な例が、軍隊組織であつたし、また世間における閥閥^{けいぼ}の

ようなファミリー集団であるといえましょう。

ファミリー集団は強いようにみえながら、その実は閉鎖^{へいさ}社会を形づくり、やがて時代に即応できなくなってくる。また同体のようでありながら、かえって派閥化し、阿梨樹^{ありじゅ}の枝のごとき、複雑怪奇な様相を呈してくるものです。やがては腐敗^{ふはい}墮落^{だらく}をきわめ、人間の心に悪心を呼びさます温床ともなっていく。今日までの多くの組織が、血縁関係のファミリー化した組織となり、低迷を余儀なくされている事実にも、このことは明らかであります。

ともかくも、学会員は、個々の特性を最大限に発揮しあい、互いに同志を尊敬しあっていくこの尊い伝統を、どこまでもたもち続けていっていただきたいのであります。

総体革命ですから、さまざまな立場の人が信仰の庭に集い、見事に咲き薫^{かか}っていくのが、その理想の姿です。たとえば、魚屋さんなら魚屋さんばかりが集ったのでは、魚屋さん革命はできても、総体革命はできない。個性の面でも、才能の面でも、多種多様の人々が、自体を顕照^{けんしょう}しつつ、広布という新世紀の山脈をめざしゆくところに、はじめて総体革命は成就されていくのであります。

こうした異体の一人ひとりが、同じ心に立脚して振る舞っていくことが、異体同心の原理の第二点目であり、もっとも大事なポイントであります。

大聖人は「自他彼此の心なく水魚の思を成して」とおおせです。これは、自分という存在、他人という存在、また、彼、此という、さまざまな立場があることは当然であり、それを否定したものではない。問題は、そこに人間の心の通いあいがなく、それぞれが、自己のこのみを中心にものごとを

考え、己の感情のみを根本として行動していくことです。そうした姿勢からは、人間関係はバラバラに分断されてしまいます。こうしたアンバランスで、不統一な人間集団には、もはや、いかなる血脈も通わないというのであります。

これに対して「水魚の思^{おもひ}」とは、魚は魚、水は水としてそれぞれ別の存在でありながら、しかも、魚は水がなければ瞬時も生きていけない。と同じように、自身の存在が、人々の織りなす多様な人間関係に支えられていることを知り、それを大切にしていくなかであります。水とは自身をとりまく人間関係であり、魚とは自分自身をたとえられたといえます。ちょうど魚が水に馴^なれ親しむように、異体同心の和合僧に親しみ、それを構成する一人ひとりを尊重し、敬^{うやまつ}っていく姿が「水魚の思」になるであります。

仏法では報恩ということが強調され、父母の恩、師匠の恩、社会の恩、さらには一切衆生の恩がいわれますが、これは自身の存在を生命的つながりのなかにあるととらえたところに打ち立てられた法門です。自己の存在、他人の存在を、ともに重視していくのが仏法であります。異体同心の原理も、こうした基盤をふまえたうえでのものであることを知らなければなりません。

しかしながら、現実の社会は、利害と打算、反目と憎悪、葛藤^{かつどう}と破壊に明け暮れ、自他彼此の心そのままであります。あたかも、狐狼^{ころう}のような隙^{すき}あらばという姿です。その現実が現実として、鋭く見すえていかなければならない。

悪に負けたり、利用されてはけっしてならない。社会はけっして甘いものではない。そのなかにあ

って、あらゆる邪悪な勢力を打ち破り、真実の人間勝利の社会を築き上げていく唯一の勢力こそ、御本仏日蓮大聖人のおおせどおりの道を歩む、われらの異体同心の鉄桶の団結以外にないと申し上げておきたいのであります。

こうした「水魚の思」を成していく根源、いいかえれば、異体同心の「同心」とは、御本尊を信ずる心が同じことです。そして御書に「日蓮と同意ならば」、また「わたうども二陣三陣つづきて」とおおせのごとく、広宣流布の大目的を、同じく己が使命とすることであります。

我見と感情とを中心としていけば、そこにはおのずから異体異心となり、不平不満と怨嫉とが渦を巻くことになるのであります。

——彼は彼の立場で懸命にがんばっているな。あの人もあそこで戦っている。この人もここで一歩前進の指揮をとっている。皆、心を洗われるような日々を送り、清新な息吹をたたえている。心から敬意を表したい。私も私の立場で、私の使命を果たしていこう——という姿になるでしょう。こうした生きた組織には、総じての生死一大事の血脈が清冽に豊かに流れ通い、功德の花が瀾漫と咲き薫ることは、必然の道理であると確信するものであります。

有名な「異体同心事」には「殷の紂王は七十万騎なれども同体異心なればいくさにまけぬ、周の武王は八百人なれども異体同心なれば勝ちぬ」（御書全集一四六三頁）と述べられています。

中国古代の王朝の交代劇という、一つの史実を引かれての指導であります。紀元前十一世紀のころの古い事柄であります。時代性、歴史性はともかくとして、人間の振る舞いという点においてみれば

ば、一つの真理がそのなかに含まれております。

司馬遷の「史記」によれば——殷の紂王は悪逆の限りを尽くしている。妲己^{だうき}におぼれ、酒池肉林の宴を張り、自身の意に逆らうものがあれば、あるいは殺し、あるいはその肉を塩辛にし、あるいは干肉^{かんにく}にし、また、諫言^{かんげん}をした忠臣・比干^{ひかん}の胸をえぐる等々であった。当然のことながら、民衆の幸福は一顧^{いっこ}だにされることがなかった。一方、その殷の支配する諸国の一つであった周に文王がおり、善政をしき、諸国の王の信望を集めていた。この文王の跡を継いだのが武王であり、彼は文王の遺志を受けて、暴逆の紂王を討つ軍を起こした。その時を得た軍に、期せずして八百の諸侯が志を同じくして集まり、討伐に向かった。これに対した紂王は、七十万の大軍を繰り出した——と記されております。

武王の軍は諸侯が集ったものであったが、天命のもと、悪を討つとの名分を掲げてその士気は十分に高かった。一方、紂王の軍は七十万と数こそ多いといっても、戦意はまるでなかった。むしろ、心のなかでは武王がやってくるのを待ち望んでおり、いっせいに反乱を起こして武王を迎え入れたという。ここに殷が敗れて、周王朝の誕生をみたのであります。まさしく武王の軍は、民衆の輿望^{よぼう}を担^{にな}い、人々の心をとらえたがゆえに、異体同心の団結が可能となり、大事を成しえたといえるのです。われわれもまた、信心を根本に、異体同心で進むならば、やがて、すべての人々が、ここに唯一の光明を見いだし、陸続と集ってくるでありましょう。

「若し然らば広宣流布の大願も叶うべき者か」との御文は、その異体同心の団結のあるところ、かな

らずや広宣流布は成就されとの御断言であります。

異体同心の実践なくして、ただ時を待っているのみでも、口で唱えているのみでも、広宣流布の実現はないのであります。広宣流布をみずからの使命とし「如来の所遣しよけんとして如来の事を行」じている人々の功德は、まさに「仏の智慧ちえをもってしても測り難しがた」との経文どおりであることはいうまでもありません。この重大な使命と福運に満ちみちた人生軌道を一直線に邁進まいしんして、最高に満足の境涯へと入っていかれますことを心より念願いたします。

我執がしゆう、驕慢きようまんが異心の本源

あまつき
剩あまつきえ日蓮が弟子の中に異体異心の者之有れば例せば城者として城を破るが如し

異体異心の者は、師子身中の虫であり、最大の敵であるとおおせです。異体同心の団結を乱し、生死一大事の血脈を途絶えさせていくゆえに、その罪は大きい。仏法のうえからいえば、一往は、五逆罪のなかでももっとも重い破和合僧の罪にあたります。しかし、再往これを論ずれば、それにはとどまらず、さらに重い「誹謗正法ひぼうしやうぽう」の罪にあたります。なぜなら、仏法の根源である生死一大事血脈、すなわち妙法蓮華經に背くゆえであります。

この「異心」とは、根本は日蓮大聖人のお心に反することでありますが、だれも最初から大聖人に背こうとして背く人はいないであります。では、なにゆえ異心に陥おちってしまうのか。私は、その異心の本源は、我執であり、自己の利益、自己の感情、慢心を中心としたいき方であると考えております。

大聖人の門下においても、三位房の例があります。彼は日蓮門下でも重きをなした高弟です。だが、彼も和合僧を破り、変死を遂げています。

「三位房が事は大不思議の事ども候いしかども・とのばらのをいには智慧ある者をそねませ給うかと・ぐちの人をもいなんと・をもいて物も申さで候いしが、はらぐろとなりて大難にもあたりて候ぞ、なかなか・さんざんと・だにも申せしかば・たすかるへんもや候いなん、あまりにふしぎさに申さざりしなり」(御書全集一一九一頁)

ここには、重要な教示があります。三位房について指導し、まちがいをいってあげられない雰囲気がつくられていたという点です。なにかいいづらい。そうしたムードを、弟子たちがいつのまにかつくってしまったのです。

三位房日行は、学はあり、門下の長老でありました。比叡山に遊学もしているし、竜象房りゅうしょうぼうをものに見事に破折する等、学に秀ひでていた。弁も立つ人であった。しかし、才知に慢ずるところがあり、また「御持仏堂にて法門申したりしが面目ななどかかれて候事・かへすがへす不思議にをばへ候」(御書全集一二六八頁)とあるように、世間の權威に弱く、一閻浮提えんぶだい第一の法門を持する誇りと自覺に欠けて

いた。「日蓮をいやしみてかけるか」(同)と指摘されていますが、京の貴族の権威よりも大聖人の仏法の存在を下にみる心があったようです。

熱原の法難のさい、後輩にあたる日興上人の応援を命ぜられたのですが、行智の奸策かんさくにかかり、日興上人に敵対し「大難にもあたりて候ぞ」という悲惨な死を迎えてしまうことは、皆さん、ご承知のことと思います。後輩が中心になって戦っている。それを応援すべく派遣はけんされたが、それが面白くなかったのではないか、と私は推量しています。

時期は日蓮門下の興亡をかけた戦いのさなかなのに、三位房日行の心を覆おほうものは、自分の出番のないことを不快に思うエゴの一念、しょせんは名聞名利を願う気持ちだけでありました。

もとより、大聖人の大智は、日行の生命傾向を鋭く洞察しておられました。そして、彼の京都弘教のおりに、戒めてもおられる。その学智を惜しみ、それが驕慢きょうまんと退転に結びつかないよう、いくたびとなく注意されようとしたにちがいありません。しかし、それを許さない雰囲気があったことが、かえって、彼の決定的な不幸をまねきよせてしまったのです。

三世各別あるべからずです。今日においても、この教訓はすこしも変わらず生きているわけです。

大聖人滅後においても五老僧に代表されるごとく、違背いはいの流れがあったことはよくご承知のことと
思います。

五老僧は親しく大聖人にお目にかかりながらも、大聖人御入滅後は、残念なことに大聖人の法門を天台門流に同じ、天台沙門と名乗り、離反していってしまった。これは理解がおよばなかったという

よりも、法門を曲げてまで天台仏法という權威のなかに、自己の保身をはかっていた姿であると思うのであります。その權威のために彼らは、仮名文字で書かれた御書を「先師の恥辱ちじよく」であるとして「スキカエシに成し或は火に焼き」までしているのであります。全民衆のために「身命を期と」された大聖人の御精神は、まったく踏みにじられてしまいました。

五老僧のうちの一人、だいこくあじやりにちちう大國阿闍梨日朗は、大聖人のもとにあっては、まさに師弟不二の法戦を展開し、それゆえに入牢の身ともなっております。大聖人がその日朗の強盛な信仰を称賛されていることは「土籠御書」つちろう（御書全集一二二三頁）に書かれているとおりであります。この日朗が、第二祖日興上人の時代に入って違背し、一步後退している事実こそ、私は後世の信仰者が銘記すべき広宣流布への重大な意義が刻印されているように思えてならない。

日蓮大聖人のもとでは活躍したが、日興上人の時代においては背信していることは、当然のこととして「三世各別あるべからず」の御聖訓に背くものであり、この原理はそのまま、現在、未来にも通ずる仏法弘通上の重要な明鏡として拝さなければならぬのであります。

脈打つ民衆救済の大慈悲

日本国は一切衆生に法華經を信ぜしめて仏に成る血脈を継がしめんとするに・還かえって日蓮を種

種の難に合せ結句此の島まで流罪す、而るに貴辺・日蓮に随順し又難に値い給う事・心中思い遣られて痛しく候ぞ

ここからは大聖人の御心境を述べられて、最蓮房を激励されているところです。

大聖人のお心は、ともかく一切衆生に「仏に成る血脈を継がしめんとする」大慈悲以外のなにものでもなかった。そのために誤れる他宗教を厳しく破折され、当時の精神、思想界の指導者と目されていた極楽寺良観へも舌鋒鋭く迫られた。これらはすべて民衆の幸福のために、自身をも顧みず正義を貫いたお心のあらわれです。

しかるに、「還って日蓮を種種の難に合せ結句此の島まで流罪す」とありますが、邪惡の僧たちの奸智と策動にのって、時の幕府が大聖人を迫害し、ついには佐渡流罪にまでいたらしめた。「此の島」とは、佐渡のことです。

佐渡流罪ということは「此の国へ流されたる人の始終いけらるる事なし、設ひいけらるるとも・かへる事なし」(御書全集九一七)とあるように、たいへんな境遇におかれたということなのです。手入れのまったくされていない、荒れ放題の塚原三昧堂で起居し、ところどころ破れた板ぶきの屋根の下で極寒をしのぐ。凡夫であれば、地獄のどん底としか表現しようのない日々でありました。

こうして一国がこぞって大聖人に迫害を加え、憎惡の炎を燃え上がらせているなかで、「而るに貴辺・日蓮に随順し又難に値い給う事」うんぬんとあるように、最蓮房は大聖人に「随順」された。ま

た、それゆえに難も受けた。どのような難であったか詳しくは不明ですが、その心はけなげである。個人的に難を受けたのではなく、大聖人門下全体が弾圧という大難を受けている渦中かちゆうだったので。そのときに、少しもひるまず「随順」していくことは、なみたいいていのことではできないし、逆に根底からその人の信心が試ためされているともいえるでしょう。

この「随順」について「御義口伝」には「随順ずいじゆん是師学しがくの事」に「随順とは信受なり」（御書全集七三九きやう）とあります。また同じく「御義口伝」に「信伏随従」について「随とは心を法華經に移すなり従とは身を此の經に移すなり」（御書全集七六五きやう）とあります。随順または随従とは信受であり、身も心も、つまり色心ともに従うことであります。

大聖人がかつてなかった最大の難を受けたときに、ともに難を受けた最蓮房に対して、大聖人はこのように、あたたかく励まされているのです。

日蓮大聖人の受けられた難は、たんなる非難中傷ではない。せんしやうぞうじやうまん 僭聖増上慢けんしやうぞうじやうまんによる難であり、宗教界の權威が策謀し、権力者を動かし、社会的力をもって制裁を加えたものであります。日本国中が蜂の巣をつついたように騒然として大聖人を憎んでいた。そうした大難のときに大聖人に随順しきり、自身が受けた難にも少しも揺るがなかったがゆえに、大聖人は最蓮房を御信頼になっておられるのであります。

「又難に値い給う事・心中思い遣やられて痛しく候ぞ」との一節に、日蓮大聖人の、弟子に対する厚い思いやりがしのべれます。どれほど恐ろしくも思い、心の葛藤かつとうもあり、無念に思ったであろうかと、

いたわっておられるのであります。大難大苦を受けられている御自分のことよりも、まず弟子を思われるこの深い心こそ、御本仏のお心であると拝するものであります。

つねに正道歩む「真金の人」たれ

金は^{こがね}大火にも焼けず大水にも^{ただよ}漂わず朽^くちず・鉄は^{くろがね}水火共に^た堪えず・賢人^{けんじん}は金の如く^く愚人^{ぐん}は鉄の如し・貴^{あに}辺^{しん}真金に非ずや・法華經の金を持^たつ故か、經に云く「衆^{しゆ}山^{せん}の中に須^{しゆ}弥^み山^{せん}為^{これ}第一・此の法華經も亦^{また}復^{また}是^{また}くの如し」又云く「火も焼くこと能^{あた}わず水も漂^{あた}わすこと能^{あた}わず」云云

金は火で焼かれても酸化しない。水にも、重いから流されないし、また朽ちない。それに対して鉄は、火に焼かれても、水の中に沈められても、錆^{さび}びて、ついにはボロボロに崩れてしまう。この例にあてはめてみれば、賢人とは金のように、どのような大難にあっても、厳しい境遇におかれても、自身の信心において微動だにすることのない人である。愚人とは鉄のように脆^{もろ}くはかない人をいう、とのおおせなのであります。

ここでは、火とか水とかは難をあらわしていますが、もう一步広げて日常の生活のなかで考えてみますと、「八風抄」に基づきのように述べられています。

「賢人は八風と申して八のかぜにをかされぬを賢人と申すなり、利・衰・毀・譽・称・譏・苦といふ逼迫の苦難が、ここにいられる火、水の具体的内容といふことができるのであります。これら、諸行無常の世界の毀譽褒貶に紛動されることなく、ひと筋の道をまっすぐに進んでいく人生は、あたかも金のごとく眩しい光を放つていくものであります。」

このなかの利・譽・称・樂等の名聞名利の誘惑、衰・毀・譏・苦といった迫害の苦難が、ここにいられる火、水の具体的内容といふことができるのであります。これら、諸行無常の世界の毀譽褒貶に紛動されることなく、ひと筋の道をまっすぐに進んでいく人生は、あたかも金のごとく眩しい光を放つていくものであります。」

最蓮房は、仏法ゆえの難という大火、大水を身に受けた。しかし、それに屈することなく信心を貫きとおしているがゆえに「貴辺豈真金に非ずや」と御本仏よりほめたたえられたのであります。

戸田先生の青年訓に「愚人にほむらるるは智者の恥辱なり。大聖にほむらるるは一生の名誉なり」との一節がありますが、大聖人から称賛される生涯を、自分らしく着実に送っていききたいものです。「法華經の金を持つ故か」とは、真金の道を歩めるのも、ひとえに法華經という最高の教えをたもつがゆえであるとおおせです。「持たるる法だに第一ならば持つ人随って第一なるべし」（御書全集四六五頁）との御文もありますが、内に懐いた思想の高低浅深がその人生の内容を決定づけるとするものが仏法の原理であります。

私どもは、すでに末法の御本仏日蓮大聖人が「智者に我義やぶられずば用いじとなり」（御書全集二三二頁）と宣言された閻浮提第一の御本尊を根本に奉持しております。あとは、この御本尊を生涯持

ちつづけていくことが肝要であり、そこに黄金の人生道を成就できることは絶対にまちがいないのであります。

「經に云く」、「又云く」とは、いずれも藥王品の文です。「衆山しゆせんの中に須弥山しゆみせん為第一・此の法華經も亦復またまた是くの如し」の文は法をたたえたもので「火も焼くこと能あたわず水も漂ただよわすこと能わず」の文は受持の人の福德を述べたものです。

火とは煩惱ぼんのうの火であり、水とは生死の水であるとされます。御本尊を持たもった一人ひとりの生命が、いかなる水火にも崩されない絶対的幸福を獲得しゆくことは、この經文の原理からも明らかであります。

生涯、広宣流布にわが人生を

過去の宿縁追いかって今度日蓮が弟子と成り給うか・釈迦多宝こそ御存知候らめ、「在在諸仏ざいざいしよぶつとどじようよしぐしよう土常与師俱生」そらごとよも虚事候はじ

さきにも述べたように、大聖人の御一生のなかにおいてももっとも厳しい大法難のなかで、最蓮房は弟子となった。今世だけの現象的世界を中心とした考え方からすれば、あまりに不思議な存在で

す。ゆえに過去の宿縁によって、いまこのように弟子となったのであらうとおおせです。

「釈迦多宝こそ御存知候らめ」とは、大聖人は、自分は凡夫であるからわからないが、仏である釈迦多宝はごぞんじであらうという意味です。その元意は、三世にわたる生命の深理、仏法の道理からすれば、現在、大聖人の弟子として難をともしにすることは、かならず過去世の深い契りちぎによるものである、との御說法なのであります。

化城喻品けじやうゆほんの「在在諸仏土常与師俱生」の文は有名です。大通覆講だいつうふくこうで十六人の王子が、それぞれに六百万億恒河沙等むひやくごうがしやの衆生に法を説き、師弟の契りを結んでいった。その人々は、その後、諸の仏土もろのぶつにつねに師とともに生じて教えをうけ、ともに仏法を實踐していったというのです。そして、いまこの娑婆世界しやばにあっては、第十六番目の王子であった釈尊が出現し得道したがゆえに、その弟子たちも俱ともに生じて、聞法し、得脱していくのであると、化城喻品には説かれています。

つまり、師と弟子とは、かならずともに生まれて、ともに仏法を行じていくものであるというのであります。この師とは、末法においては御本仏日蓮大聖人であられることはいうまでもありません。

それでは、大聖人滅後、この經文をいかに読むべきでしょうか。大聖人は、そのためにこそ、戒壇の大御本尊を遺されたのであります。また、日興上人にいっさいを御付嘱あそばされたのであります。ゆえに私たちが、戒壇の大御本尊を根本とし、日夜、わが家の御本尊を拝し奉ることは、さながら御在世のごとし、であります。まさしく「在在諸仏土常与師俱生」であります。

そして私たちは、広布の庭に戦っている宿縁深厚の仏法兄弟であります。その絆きずなをより強くしてい

くものは、御本尊への同じ祈りであり、民衆救済、広宣流布への同じ悩みであり、実践であります。皆さんは、順風満帆のときも、逆境のときも、この広布への異体同心の和合のなかで生ききり、つぎの生を再び大御本尊の慈光をうけながら、そこでまた衆生所遊樂の人生を満喫しきっていいこうではありませんか。

この「在在諸仏土常与師俱生」の文は、信心の眼で拝していくなれば、甚深じんじんの意義を含んでいると思う。この文を、どれだけわが身の実践のうえに顕現するかで、日蓮大聖人の本眷属ほんけんぞくであるかいなかが決定的なものであるといってもよい。

世の中には、さまざまな縁があります。親子、兄弟といった血縁もあれば、知人、友人、上司と部下、教師と生徒という、社会的な縁もある。それらもひじょうに重要な縁であり、それが円滑えんかつにいかどうか、建設的意欲にあふれて交流していくかいなかで、家庭、社会の昇華の成否もあります。

しかし、師匠と弟子、すなわち師弟の関係、宿縁はもっとも深く、重にして大である。人間としていかに完成していくか、どう人生にかかわっていくか、人類史に貢献していくかを教え、研磨けんましあう師弟関係の関係こそ、今世にとどまらず、三世永劫えいこくに、また山海空市さんかいくうしいずれにあっても絶えることのない生命の絆きずなであるからであります。

利害によって結ばれた縁は利害によって離れていく。外から与えられた縁は、条件の変化によって、また時間、空間の推移によって変貌へんぼうしていくのであります。しかし、生命の心奥からの共鳴である師弟不二の協奏曲は、三世にわたり十方に通ずる妙音となるにちがいない。

私たちは、御本仏日蓮大聖人の末弟子であります。そしていま、純信の和合僧団が築き上げられている。この姿こそ人類史上、いまだかつてない最高に麗しい人間関係の精華であると、誇りに満ちて確信していただきたいのであります。

この「在在諸仏土常与師俱生」の文に接するたびに、私には、昭和二十一年十一月十七日における牧口先生の三回忌法要での戸田先生の、烈々たる気迫で語りかけられた言葉が胸につきささってくるのであります。

「あなたの慈悲の廣大無辺は、私を牢獄まで連れて行ってくださいました。そのおかげで『在在諸仏土・常与師俱生』と、妙法蓮華經の一句を、身をもって読み、その功德で、地涌の菩薩の本事を知り、法華經の意味を、かすかながら身読することができました。なんたる幸せでございましょうか」戸田先生は、御本尊を持っていけない牢獄のなかでさえ、御本尊を思い浮かべ、唱題に唱題を重ね「在在諸仏土常与師俱生」の御文のままに、御本尊とともにあるご自身を発見され、そこから、この御本尊を生涯流布していくとの、広宣流布への深い使命感に立たれたのであります。

この「あなたの慈悲の廣大無辺」といい、「なんたる幸せでございましょうか」との叫びといい、ただただ、御本尊への純一な信のあらわれでなくしてなんでありましょうか。ゆえに、この戸田先生の激闘を思うにつけ、いずこであれ、いかなる境遇であれ、信心のなかに「在在諸仏土常与師俱生」を実感できることを知るのであります。

「在在諸仏土」とは、一往は人間の住む世界であります。いっさいの生命が一念三千の当体であるこ

とは当然でありますが、自身の変革をし、仏道へとみずから向かうことができるのは、聖道正器たる人間生命にかぎるからであります。

譬喩品によれば、法華經誹謗の人は、あるときは野良犬として瘦せ衰え人々から卑しまれ、あるときはロバとして杖で打たれながら重い物を背負いつづける一生である。あるときは蛇身となって腹行し、人々から忌みきらわれるのであります。それに比べれば、私たちは永遠に、生命の大空に妙なる音楽が流れ、胸中の花園に遊樂するがとき生を受けるのであり、人間としてもっとも尊い一生を送り、終わることは、今生最高の思い出であります。それだけでも感謝の念をもたなければならぬ。そのゆえにこそ、その一生になにをなしうるかを考えるべきであると思うのであります。

しかし「仏土に生まれる」とは、仏国土があらかじめ存在していて、そこに私たちが生まれるというわけではありません。依正不二の原理からすれば、居住する当体に即して国土がある。ゆえに御本尊とともに仏道を歩むところ、いっさいの国土が常寂光土となるとの意であります。

つぎに「在在諸仏土」の文を、ヨコにみていくならば、十方世界のあらゆるところに仏土があるということをも示しております。よく戸田先生は壮大な宇宙觀を語られながら「この地球上で折伏し広宣流布したならば、また他の星へ行つて働くのだ」と懇談的にいっておられた。仏法は三世十方に仏土ありと説いております。たんに地球上だけというような狭い教えではない。

また、現代の天文学も、この仏法の宇宙觀を支持しているかのようにあります。いま星雲と星雲の間、に漂う微細な宇宙塵が、寄り集まって、生命体のもととなる物質を作りだしている可能性がある

もいわれております。人間のような高等生物が生息している可能性も、無量の星のなかには数多くあると考えてよさそうであります。それを「在在諸仏土」と表現されたとも考えられます。

私たちは、タテに久遠の過去から永遠の未来に、ヨコには全宇宙に広がる仏国土に自在に遊戯しつつ、人間共和の理想郷建設に励む生死であると確信して進みたいのであります。

求道実践で境涯革命

殊に生死一大事の血脈相承の御尋ね先代未聞の事なり貴貴、此の文に委悉なり能く能く心得させ給へ、只南無妙法蓮華經釈迦多宝上行菩薩血脈相承と修行し給へ

最蓮房が「生死一大事血脈」について質問したことに對し、このような大事な問題についての質問は、いまだかつてないことであり、まことにすばらしいことである、と誉められているのです。そして、それについては、この手紙に詳しく書きましたから、これをよくよく心に刻んでいきなさい、と。

その結論は「只南無妙法蓮華經釈迦多宝上行菩薩血脈相承」と修行することであるとおおせです。すなわち、南無妙法蓮華經こそが釈迦、多宝の二仏より上行菩薩に付嘱された血脈相承であると

信じ、修行、実践しなさいということであります。

求道ということがいかに大切かということが大聖人は教えられるとともに、求道即実践へと境涯を開かせていく大聖人の深い御指南であらうと拝するのであります。

求道の精神を教えたものとして、雪山童子の修行は有名ですが、それに関して私がとくに強調したいのは、雪山童子が悟り^{きと}を得るにいたった過程であります。

ござんじのとおり、雪山童子は、法を求めて修行しているさなか「諸行無常是生滅法^{しよぎやうむじやうぜしやうめつぽう}」という声を聞く。そのなかに悟りの法があると感じた雪山童子は、目の前に現れた鬼神に法を求めるのであります。これはじつは帝釈天王^{たいしやくてんのう}が化作^{けさ}した姿であります。鬼神というのは恐ろしい、卑しい姿をしている。当時、略奪等が頻繁^{ひんぱん}にあったという歴史的背景もありましょうし、法を求めるのは、外見の荘厳な姿、地位によるのではなく、いかなる「法」をもつかという中身を知っていかなければならないとの教えも込められているのであります。

しかし、私はさらに、もう一步深めてその意味を探っておきたい。

鬼神は雪山童子に、人間の温かな肉を求める。雪山童子はわが身を鬼神に与えることによって、教えを受けることができたのであります。仏法を求めるには不自惜身命の決意がなくてはならないのは当然であります。それにしてもなぜ人間の肉が必要なのか、また、なぜ帝釈は鬼神となって肉を求めたのでありましょうか。そこで雪山童子が鬼神から教えを受けた残りの半偈^{はんげ}を思い出していただきたいのであります。

それは「生滅滅已寂滅為樂」、すなわち「生滅滅し已おわって寂滅を樂と為す」という法門であります。現実の世界における生滅というものを滅し已おわって、生も滅もない寂滅涅槃じやくめつねはんの境地を樂とするという意味であります。これは一往、小乗教の思想であり、法華經の究極、なかんずく日蓮大聖人の南無妙法蓮華經には遠くおよばない法門であります。現実の人生に起こる生や滅に目を奪われ執着するのでなく、その奥にある寂滅の世界を求めなくてはならないことを教えたものとして、不変の真理といえます。

したがって、この法門を真実に聞き、悟るためには、雪山童子がまず、わが身に執着する生命の傾向を脱皮する必要があった。そのために、鬼神が必要だったのであります。考えてみれば、鬼神が現れ、雪山童子に肉を求めたことが、答えでもあったのでありましょう。雪山童子がそれにこたえて、身を捨てる決意をしたとき、後の半偈を受ける資格がそなわった、というより、もはや雪山童子は悟ったのであります。

仏の説法を聞く人のなかには、「諸行無常是生滅法」や「生滅滅已寂滅為樂」という教えを聞いてもわからない人がいる。そういう人にとって、雪山童子の実践の姿自体、法門の内容を教えたものだったのであります。經典に譬たとえが多く説かれるのも、深遠しんえんな哲理を平明に教えようとするゆえでありましょう。

これをさらにいえば、鬼神が肉を求めてから法を説こうとしたことは、仏法の悟達ごたつとは実践のなかにあることを示しております。雪山童子の悟達の高低浅深は別として、人間の行為のなかにしか仏法

はないのであります。もし雪山童子が、身を捨てて法を求めるといふ実践がなければ、いかに高邁こうまいな法に接しても、けっして悟ることはできなかったにちがいない。実践なくして仏法の体得はない。仏法理論は、その悟達のうえに、後に体系づけられていったものであります。

たしかに、仏法には深い生命論の展開があり、それをおろそかにしてはならない。しかし、仏法教義は本来、仏の悟りを展開したものであり、悟りは実践によって体得する以外にない。仏法はなにもむずかしいことをいっているのではない。いかにすればよりよく人生を送れるか、どう生きることが人間にとってもっともかなった道であるのか、わが生命をいかに変革していくかを、力強く説いたものにほかならない。それが人間の真実の生き方になっっているゆえに、深い哲学的な裏づけが発見されるのであります。

ゆえに生死一大事血脈ということも、わが生命のなかに発見するしかないのであります。わが生命の日々刻々の回転とともに、この一書の脈動が伝わってくることを訴えたいのであります。

つぎに「南無妙法蓮華經釈迦多宝」で、釈迦、多宝の二仏並座びやうざのあらわす法華經の体が南無妙法蓮華經であるということ。これは、天台学僧として、最蓮房がともすれば文上の法華經に引きずられる面をもっているのに対して、その法華經の究極が南無妙法蓮華經であると、かさねていわれているのであります。

そしてさらに「上行菩薩血脈相承」で、この法華經の会座えざで付嘱を受けた上行菩薩は、末法弘通の大導師でありますから、これこそが末法今時の唯一の正法であることを示された言葉と拝せまします。

「五大」は妙法五字の力用

火は焼照^{やきてあらず}を以て行と為し・水は垢穢^{くたい}を浄^{きよむ}るを以て行と為し・風は塵埃^{じんあい}を払ふを以て行と為し・又人畜草木^{じんちく}の為に魂^{たましい}となるを以て行と為し・大地は草木を生ずるを以て行と為し・天は潤^{うる}すを以て行と為す・妙法蓮華經の五字も又是^{また}くの如し・本化地涌^{ほんけじゆ}の利益^{りやく}是なり

地水火風空の五大の働きを示し、それが妙法蓮華經のあらわす用^{よう}であり、本化地涌の利益にほかならないことを述べられたところでもあります。

地水火風空は、宇宙万物を構成する要素であり、これを五大といいますが、五大はそのまま妙法蓮華經であります。

「三世諸仏総勸文教相廃立」に「釈迦如来・五百塵点劫^{じんてんごう}の当初^{そのかみ}・凡夫にて御坐^{おわ}せし時我が身は地水火風空なりと知^しめして即座に悟^{さと}を開き給いき」(御書全集五六八頁)と述べられている「我が身は地水火風空なり」ということも、「我が身は妙法蓮華經なり」との意にはかなりません。

ともあれ、万物究極の法たる妙法蓮華經は、この現象の世界を離れたどこかにあるのではなく、現実の物質世界を形成している地水火風空それ自体であると喝破^{かつぱ}したところに、仏法の偉大な卓見があ

の力、地涌の利益としてみた場合、どのような意味になるかということです。

「火は焼照^{やきてらす}を以て行と為し」とは、物を焼くのと、まわりを照らすのと、この二つの働きが火にはあるということですが、その仏法哲理からの意義については、「御義口伝」——序品の「阿若憍陳如^{あにぎょうじんによ}の事」(御書全集七一〇頁)に詳説されております。

そこで、火とは法性の智火であり、照らすほうは「随縁真如^{ずいえんしんによ}の智」、焼くほうは「不変真如^{ふへんしんによ}の理」で、この照焼の二徳を具えているのが南無妙法蓮華經である、と。

そして、私どもが妙法を唱えるならば「生死の闇^{しゆゐ}を照し晴して涅槃^{ねはん}の智火明了^{みよりうりよう}なり」、すなわち「生死の闇」を照らすことになる。また「煩惱^{ぼんのう}の薪^{たきぎ}を焼いて菩提^{ぼだい}の慧火^{えか}現前するなり」、すなわち「煩惱の薪」を焼くのである、とおおせであります。

この「火」は、上へ行くがゆえに、四菩薩のなかでは、上行菩薩をあらわしています。

つぎに「水は垢穢^{くえ}を浄^{きよむ}るを以て行と為し」とは、宿業^{しゆくごう}の垢^{あか}、五濁^{ごじよく}の穢^{けが}れを浄めるということであります。すなわち妙法という生命本源の力のもっている、生命浄化の働きを象徴しているわけであります。これが、四菩薩のなかでは浄行菩薩にあたることはいうまでもありません。

御本尊を受持したとき、過去の悪業^{あくごう}によって未来、長いあいだにわたって受けていくべき苦しみが、今世に集約されて軽いかたちで出てくる——いわゆる転重軽受という原理は、ここからあらわれてくるのであります。

あたかも、古いホースの中につまった汚れが、水を流すといっきよに出てくるようなもので、当座

の力、地涌の利益としてみた場合、どのような意味になるかということです。

「火は焼照^{やきてらす}を以て行と為し」とは、物を焼くのと、まわりを照らすのと、この二つの働きが火にはあるということですが、その仏法哲理からの意義については、「御義口伝」——序品の「阿若憍陳如^{あにやきょうじんによ}の事」(御書全集七一〇頁)に詳説されております。

そこで、火とは法性の智火であり、照らすほうは「随縁真如^{ずいえんしんによ}の智」、焼くほうは「不変真如^{ふへんしんによ}の理」で、この照焼の二徳を具^{そな}えているのが南無妙法蓮華經である、と。

そして、私どもが妙法を唱えるならば「生死の闇^{やみ}を照し晴して涅槃^{ねはん}の智火明了^{みよりうりよう}なり」、すなわち「生死の闇」を照らすことになる。また「煩惱^{ぼんのう}の薪^{たきぎ}を焼いて菩提^{ぼだい}の慧火^{えか}現前するなり」、すなわち「煩惱の薪」を焼くのである、とおおせであります。

この「火」は、上へ行くがゆえに、四菩薩のなかでは、上行菩薩をあらわしています。

つぎに「水は垢穢^{くたい}を浄^{きよむ}るを以て行と為し」とは、宿業^{しゅくごう}の垢^{あか}、五濁^{ごじよく}の穢^{けが}れを浄めるということであります。すなわち妙法という生命本源の力のもっている、生命浄化の働きを象徴しているわけでありま

す。これが、四菩薩のなかでは淨行菩薩にあたることはいうまでもありません。

御本尊を受持したとき、過去の悪業^{あくごう}によって未来、長いあいだにわたって受けていくべき苦しみが、今世に集約されて軽いかたちで出てくる——いわゆる転重軽受という原理は、ここからあらわれてくるのであります。

あたかも、古いホースの中につまった汚れが、水を流すといっきよに出てくるようなもので、当座

は苦しい思いをするかもしれませんが、それを出しきってしまったえば、あとはゆうゆうと福德を積み重ねゆく人生となるのです。

「風は塵埃を払ふを以て行と為し」とは、この人生においてふりかかってくるあらゆる苦難、また信心の途上に起こってくる障魔の克服をたえております。風が塵や埃を吹きとばしてしまうように、力強い、朗々たる題目によって、いっさいの障魔や人生の苦難は打ち碎き、吹きとばしていくことができるのであります。この「風」にたとえられているのが、四菩薩のうち、無辺行菩薩です。

また、この「風」が「人畜草木の為に魂となる」とおおせられているのは、古来、風は宇宙自然の生気の象徴とされ、風が吹くことによって、万物に生気を吹き込むと考えられたのによるようであります。

つぎに「大地は草木を生ずるを以て行と為し」とは、あらゆる生命に、その安定性を与えていく働きをいったものであります。考えてみると、生命の営みほど複雑、微妙なものはない。たとえば、私どもの体温は平均三十六・五度前後ですが、ほんの二、三度上がっただけでも、たいへんな苦痛を味わいます。いったい、どのようにして、ほぼ一定の温度に保たれているのか、そのシステムは不思議としかいようがない。心の働きも、瞬間ごとに変化しながら、しかも統一性が保たれている。この心身にわたる安定性をもたらしているのが、四菩薩のうちの安立行であります。

「天は潤すを以て行と為す」——この「天」とは、地水火風空の「空」に相当すると考えられます。

それは、四菩薩とは別に、妙法蓮華経それ自体の象徴であります。天空が雨を降らして万物を潤すよ

うに、妙法蓮華經が一切万法を利益し、万法の働きの根源となつてゐるということであります。

この「生死一大事血脈抄」の御文と同じ意味の御文が、「御義口伝」の一節にあります。

「今日蓮等の類南無妙法蓮華經と唱え奉る者は皆地涌の流類なり、又云く火は物を焼くを以て行とし水は物を淨むるを以て行とし風は塵垢を払うを以て行とし大地は草木を長ずるを以て行とするなり四菩薩の利益是なり、四菩薩の行は不同なりと雖も、俱に妙法蓮華經の修行なり、此の四菩薩は下方に住する故に釈に『法性之淵底玄宗之極地』と云えり、下方を以て住处とす下方とは真理なり」(御書全集七五一頁)

火が物を焼くのも、水が物を淨めるのも、風が塵垢を払うのも、大地が草木を育てるのも——それ自体、本然の作用であります。これは、大自然の働きに地涌の菩薩を配した場合であります。

自発の意志が地涌の菩薩の本分

さらに、人間の営為として地涌の菩薩を論じていくならば、つぎのようにいえると思ひます。

みずからの生命を燃焼しながら人々の幸福のために戦つていくのも、自他ともに生命を浄化させていく生命変革の活動も、いかなる醜い世間の塵埃も風の吹くがごとく払いさつていく振る舞いも、人が安心して依処としていく信頼の柱となつていく姿も、地涌の菩薩の本然の発露であるということであります。

だれからいわれるというものでもない。だれから押しつけられたというのでもない。自発の意志で、人のため、世のため、社会のために、妙法という最高の哲理をもって活動していくことは、地涌の菩薩の本分なのであります。

内より、地涌の菩薩という生命は発動してきます。それは、どこからか。わが胸中のいずれに、地涌の菩薩の本拠地はあるのでしょうか。

日蓮大聖人は、それを、天台の釈を引用して「法性之淵底玄宗之極地^{ほつしょうのえんていげんしゅうのごくち}」といわれています。法性の淵底も、玄宗の極地も、生命の奥底、生命の根源の意味であります。すなわち、南無妙法蓮華經という真如の都こそ、地涌の菩薩の住处であります。

南無妙法蓮華經と唱えたとき、南無妙法蓮華經を内より開いていったとき、真如の都を顕現し、内なる生命の力を社会と人生に発揮しながら、地涌の菩薩の使命を全う^{まっとう}していくことができるのであります。これは、しょせん地涌の菩薩は妙法蓮華經の作用であるということです。

してみるならば、自身が南無妙法蓮華經の当体とあらわれたとき、その所作として地涌の菩薩の振る舞いとなるのであります。私たちは、久遠の流れに棹^{さか}さして生きる地涌の菩薩の眷属^{けんぞく}の集いでありま

す。地涌の菩薩ということでは、恩師戸田城聖先生の獄中における二つの体験であります。なかんずくその二回目の使命の自覚であります。

昭和十九年元旦を期して、大石寺の大御本尊を思い浮かべながら唱題の響きのなかに、法華經を読むことを始められました。三月の初め、法華經の開經である無量義經德行品第一のなかにある、十二行の偈げの三十四の否定から「仏とは生命の働きなんだ!」と、込み上げてくる感動を抑おさえることができなかったとのことです。これが第一回目の体験であります。

それから、牢獄の春が過ぎ、夏も去り、秋もゆかんとしていました。恩師は、戦時中の凍こるような独房のなかで、骨と皮だけの衰弱した体ながらも、激烈な思索を続けられていた。十一月中旬のある日、恩師は法華經の從地涌出品第十五の偈を想い出しておられた。

——是もろもろの諸の菩薩、釈迦牟尼しやかにむに仏の所説おんじょうの音声おんじょうを聞いて、下より発来はつらいせり。一一の菩薩、皆是れ、大衆の唱導の首なり。各六万恒河沙等の眷属けんぞくを將ひきいたり、況や五万、四万、三万、二万、一万恒河沙等の眷属を將ひきいたる者をや。況や……

恩師はいつのまにか、虚空にある自身を発見されていた。数かぎりない六万恒河沙の大衆のなかで莊嚴無比な大御本尊に合掌がっしょうしている自分、その自分がある厳肅な久遠の儀式を鮮明に体験されていたのでした。狭い粗末な獄舎のなかで、朝日を浴びて、喜悅の感動に茫然ぼうぜんとなりながら、熱い涙をぬぐおうともされませんでした。「確かに自分は地涌の菩薩であったのだ!」という、深い激しい生命の大歡喜は、筆舌には尽くせないものがあつたことでしよう。

戸田先生は、地涌の菩薩としての使命を自覺され「これでわが一生は決まった。きょうの日を忘れない。この尊い大法を流布して、わが生涯を終わるのだ!」と一大決心をされたのであります。

ちょうど、この同じころ、別棟の独房におられた戸田先生の人生の師・牧口常三郎先生は、七十三歳という老齢の身でありながら軍部権力の弾圧に一步も退くことなく戦っておられました。ついにその尊い殉教の生涯を閉じられたのでありました。昭和十九年十一月十八日のことです。まさに牧口先生の死と戸田先生の地涌の菩薩としての自覚は、時を同じくしていたのであります。

この戸田先生の体験、そこから得られた御本尊への確信、広布への大情熱が、戦後の創価学会の発展の基点となったことを銘記すべきであります。戦前の創価学会においても、広宣流布への使命感がなかったわけではありません。しかし、ひとたび弾圧の嵐が吹くや、もろくも崩れ去っていった事實は、その使命感の弱さを物語るものでありました。戸田先生の叫びは、獄中という最悪の事態のなかで、御本尊を思い浮かべての唱題による法悦と感謝報恩の念で、地涌の菩薩の眷属としての自覚から広宣流布を叫ばれたところに、深い意義があるのであります。

この一念は、いかなる波浪のなかにも厳として揺るがぬ広宣流布への強い自覚であります。この一点において、創価学会の折伏弘教の団体としての大発展の道は開かれたのであります。

恩師は「創価学会の歴史と確信」において、つぎのようにいわれています。

「ちょうど、牧口先生のなくなったころ、私は二百万べんの題目も近くなって、不可思議の境涯を、ご本仏の慈悲によって体得したのであった。その後、取り調べと唱題と、読めなかった法華経が読めるようになった法悦とで毎日暮らしたのであった」

まさしく、まんまたるエネルギーを秘めながら、後に大地より湧きいずるであろう多くの地涌の

集いを、因果俱時として決定づけた一瞬であったといつてよいのであります。

四十五歳の戸田先生は、このとき「四十二シテ惑まどハズ、五十二シテ天命ヲ知ル」との孔子の言に比して「彼に遅るること五年にして惑わず、彼に先だつこと五年にして天命を知りたり」と叫ばれました。

そして、翌年七月、出獄され、焼け野原に一人立たれて、学会再建の第一歩を踏みだされたのであります。師は死して獄門を出、弟子はいま、生きて同じ門を出たのであります。生死の二法は一心の妙用みょうようであります。戸田先生の胸中には、万惑の思いがかけめぐったことでありましょう。ここに、今日の学会の広布弘教の源流があったことを、けっして忘れないでいただきたいのであります。

大聖人こそ末法万年の闇照らす御本仏

上行菩薩・末法今の時此の法門を弘めんが為に御出現之れ有るべき由・經文には見え候へども如何いかが候やらん、上行菩薩出現すとやせん・出現せずとやせん、日蓮にっれん先まず粗はな弘め候なり

南無妙法蓮華經の法門を弘めるため、上行菩薩が末法の今の時に出現されるであろうということ、法華經の文には説かれているが、どうなのであろうか。上行菩薩が出現されているにせよ、出現

されていないにせよ、その上行菩薩が弘められる法を、日蓮大聖人はまず、ほぼ弘めているのである、ということです。

いうまでもなく、日蓮大聖人の御自覚は、外用の辺において——すなわち行動、実践においては、御自身が上行菩薩の再誕にはかならないということにあります。内証すなわち奥底の本地は、久遠元初の自受用報身如来であられます。しかし、一般的に示された御書においては、この外用・上行再誕ということすらも、ひじょうに遠回しに表現されている。

「先ず」「先立ちて」等といわれ、御自分がその当人であるとは、なかなかおっしゃらない。これは、上行といえば、法華經によると、本門の釈尊でさえも色あせてみえるほどの堂々たる大菩薩群の本化地涌のなかにあって、もっともすぐれた上首である。それに対し、大聖人の現実のお姿は凡夫僧であられる。このことから、もし大聖人が自分こそ上行であるといっても、人々はよけいに疑いを起こし、謗法の罪を深くするのを心配されて、直接的表現を避けられたと考えられます。

だが、もし、仏法の眼からみるならば「日蓮先ず粗弘め候なり」とのお言葉に、明らかに、大聖人御自身が上行であるとの元意がうかがわれるのであります。

なぜかならば、法華經がなんのために説かれたか、という一つの目的は、本化地涌を召しいだして、滅後末法の弘通を付嘱することにあつたからであります。ゆえに、神力、嘱累の付嘱が終わるや、十方の諸仏はみな本土に還り、多宝の塔も元へ戻って、莊嚴な虚空会の儀式は、靈山会に復帰するのであります。

これだけたいへんな力を入れて本化地涌、そのなかでも別して上首上行への付嘱がなされたのに、いま末法にいたって、上行菩薩の弘めるべき法を日蓮大聖人が弘められている。もし、大聖人が上行ではない、まったく別人だとしたら、あの法華經の儀式はなんのためだったのかということになってしまいうわけがあります。多宝如来の出現も、十方諸仏の来集も、意味を失うことになってしまいうのであります。そんなことがあるわけがない。

この明白な道理のうえからも、日蓮大聖人御自身が、一往外用の辺において、上行菩薩の再誕であり、しかも内証においては末法万年の闇を照らす新たな大仏法建立の仏、すなわち久遠元初の自受用報身如来であられることが知れるのであります。

信心の血脈なくば法華經も無益

相構え相構えて強盛の大信力を致して南無妙法蓮華經・臨終正念と祈念し給へ、生死一大事の血脈此れより外に全く求むることなかれ、煩惱即菩提・生死即涅槃とは是なり、信心の血脈なくんば法華經を持つとも無益なり、委細の旨又又申す可く候、恐恐謹言。

「相構え相構えて」とかさねていわれているところに、これこそがもつとも肝要な結論であるとお

心がうかがわれます。まさしく最蓮房にとって、もっとも苦境のさなかにあり、成仏へと向かうかどうかのもっとも重要な時を迎えていました。なんとかこの一人の人間に、大聖人の生命の血脈を継がせたいとの強い御一念が拝せられます。生死一大事の血脈といっても、強盛な大信力を出して、南無妙法蓮華經と唱えること以外にない、ということでもあります。

「強盛」といい「大信力」といい、大聖人が全生命をふりしぼって一個の人間の信力を奮い立たせられようとしているお気持ち伝わってきます。

「臨終正念」とは、死に臨んで、この妙法に対する信心の心を乱さないこと、妙法を信受しえたことを無上の喜びとし、これで思い残すことはないという満足しきった心境で、一生を終わる姿であります。

したがって「南無妙法蓮華經・臨終正念と祈念し給へ」とは、死に臨んだとき、南無妙法蓮華經がわが正念であるように、いまからしっかり祈念していきなさい、ということであり、同時に、ただ今が臨終であるとの自覚で真剣に祈っていきなさい、ということでもあります。

臨終正念の祈念に立ったとき、己心の奥底の妙法が湧現して、宇宙に遍満する妙法と冥合する。ここに、生死の一大事が脈々と流れるのであります。これ以外に、信心の生死一大事血脈をわが身に具現する道はないということでもあります。そのとき、わがこの凡夫の身そのまま妙法の当体とあらわれ、したがって煩惱即菩提、生死即涅槃となるのです。

それゆえに、本抄の総結論として「信心の血脈なくんば法華經を持つとも無益なり」と厳しくお

せられているのであります。結局、信心に始まり、信心に帰結する。

「信心の血脈なくんば法華經を持つとも無益なり」——法華經という法のみでは、真実の成仏の道には入れない。法華經を身をもって読み、人法一箇の当体とあらわれてくださった日蓮大聖人以来の正統の信心——これが「信心の血脈」なのであります。この人法につながった信心でなくては、いかに法華經をたもっているといっても無益なのです。

この文は、信心のなかにこそ御本尊の仏力、法力も顕あらわれるという御指南でもあります。

有名な「日女御前御返事」の一節に「此の御本尊全く余所よそに求る事なかれ・只我れ等衆生の法華經を持ちて南無妙法蓮華經と唱うる胸中の肉団におはしますなり……此の御本尊も只信心の二字にをさまれり」(御書全集一二四四頁)とある。

御本尊も信心の二字におさまっているとの大聖人の明言であり、信ずるなかにこそ御本尊の力は顕現されるということなのです。

日寛上人は「観心本尊抄文段」において「我等この本尊を信受し、南無妙法蓮華經と唱え奉れば、我が身即ち一念三千の本尊、蓮祖聖人なり」といわれ、「故に唯仏力・法力を仰ぎ、まさに信力・行力を励むべし。一生空むなしく過して万劫悔くゆることなかれ」と結論されているのであります。

このように「信心の血脈なくんば法華經を持つとも無益なり」とは、じつに嚴肅な御指南なのであります。信力、行力がなければ、仏力、法力は顕れませんし、もったいなくもわが身が即一念三千の当体とあらわれるはずもないのであります。「血脈」とは「信心」である——ということに、いっさ

いはつきるのであります。

さらに、この信心の血脈ということに関して、第九世日有上人の「化儀抄」には、つぎのように述べられています。

「信と云ひ血脈と云ひ法水と云ふ事は同じ事なり……高祖已来の信心を違へざる時は我れ等が色心妙法蓮華經の色心なり、此の信心が違ふ時は我れ等が色心凡夫なり、凡夫なるが故に即身成仏の血脈なるべからず」と。

この「化儀抄」を解説した堀日亨上人の「有師化儀抄註解」には、つぎのような説明を加えられています。

「信心と血脈と法水とは要するに同じ事になるなり、信心は信行者にあり・此信心に依りて御本仏より法水を受く、其法水の本仏より信者に通ふ有様は・人体に血脈の循環する如きものなるに依りて・信心に依りて法水を伝通する所を血脈相承と云ふが故に・信心は永劫にも動揺すべきものにあらず・攪乱すべきものにあらず、若し信が動けば其法水は絶えて来ることなし、爰に強いて絶えずと云はば其は濁りたる乱れたる血脈法水なれば・猶仏法断絶なり、信心の動かざる所には・幾世を経とも正しき血脈系統を有し仏法の血液活潑に運行す」と。

また「仏法の大師匠たる高祖日蓮大聖開山日興上人已来の信心を少しも踏み違へぬ時、末徒たる我等の俗悪不浄の心も・真善清浄の妙法蓮華經の色心となるなり此色心の転換も只偏に淳信篤行の要訣にあり、若し此の要訣を遵奉せずして・不善不浄の邪信迷信となりて仏意に違ふ時は・法水の通路

徒らに壅塞せられて・我等元の儘の粗凡夫の色心なれば・即身成仏の血脈を承くべき資格消滅せり、悲しむべき事どもなり」とも峻厳に記録しておられます。

すなわち「信心の血脈」とは、日蓮大聖人、日興上人以来の信心を、すこしも踏みたがえぬところに受け継がれるものであることが明確であります。ここに、遣使還告唯授一人の代々の御法主上人の尊きお立場があられる。

そして「仏法の血液活潑に運行す」とあるごとく、私たちが、日蓮大聖人御遺命の広宣流布に向かって、正しき信心を貫くとき、もったいなくも、大聖人の御生命が流れ通うのであります。

しかして、その信心とは日蓮大聖人、および日興上人に学ぶのであり、大聖人の御書に学び、日興上人の遺誠置文を肝に銘じつつ、御法主上人の御指南をうけて、広宣流布のため不惜身命の実践を貫く信心のなかに、御本仏の血脈が「活潑に運行」していることを断言するものであります。

文永九年 壬申二月十一日

最蓮房上人御返事

桑門 日蓮花押

「生死一大事血脈抄」を著された文永九年二月十一日という日について申し上げておきたい。この日

は、奇しくも、日蓮大聖人が「立正安国論」において、また前年の九月十二日の竜口法難たつのくちのさいにも、幕府に対して厳しく予言し警告されていた「自界叛逆難じかいはんぎやくなん」、すなわち内乱が勃発ぼつぱつした日でありま
す。

「今年二月十一日十七日又合戦あり……薬師経に云く『自界叛逆難』と是なり、仁王経に云く『聖人
去る時七難必ず起らん』云云、……日蓮は此関東の御一門の棟梁とうりょうなり・日月なり・亀鏡なり・眼目げんもくな
り・日蓮捨て去る時・七難必ず起るべしと去年九月十二日御勘氣ごかんきを蒙りし時大音声だいおんじようを放てよばはりし
事これなるべし纔わずかに六十日乃至百五十日に此事起るか」(御書全集九五七ページ)と、事件直後の三月二
十日に「佐渡御書」のなかでおおせのように、大聖人の予言が的中したのであります。

当時、京都の六波羅南探題ろくはろなんたんたいだった時宗の庶兄しよけい・時輔ときすけが、弟の時宗を倒して執権の地位を奪おうとの
陰謀いんぼうをたくらんだことが発覚し、その一味とされた教時、盛直らを、時宗が先手をうって討滅したも
のであります。同族あい食む死闘が展開されたが、やがて時輔の一族が全滅して、戦いは終わった。
これが「二月騒動」です。

大聖人は、この内乱の勃発が間近いことを、すでに一か月ほど前の一月十六日に、塚原問答の終了
後、本間六郎左衛門尉じように対して指摘し、警告されているのであります。

したがって、大聖人は本抄を執筆されているとき、騒然たる内乱に日本中が動揺していることを予
感しておられたにちがいない。そのなかで悠然ゆうぜんと永劫の未来を眺望ちようぼうしつつ、令法久住の血脈を残そう
とされたのであります。

また「桑門^{そうもん}」とは、沙門^{しゃもん}のことであり、静志、貧道、動息^{ごんそく}などとも訳します。善法を修して悪法を破すという意味で、出家して仏道を修行する者をいう。

大聖人は、文永十年四月の「観心本尊抄」では「本朝沙門日蓮撰^{ほんちようせん}」とされており、また、同じ文永十年閏五月の「願仏未来記」でも「桑門日蓮之を記^{しる}す」としたためられております。「桑門」とは「扶桑沙門^{ふそう}」の意味で、すなわち「本朝沙門」と同意で用いられているとも考えることができます。

本尊抄で「本朝沙門」とされたのは、天台沙門に対する言葉であり、じつは大聖人の強い御確信のうえからの表現であります。つまり本朝、すなわち日本国こそ、末法万年の民衆を救済される御本仏出現の地であることを示しており、末法における最高の善法を修し、悪法を破される日蓮大聖人こそ、まさにその御本仏であることを明かされているともいえます。

以上、「生死一大事血脈抄」をとおして、私の感ずるままを述べてまいりました。

最後に、わが同志よ、わが久遠の友よ、広宣流布の道を進んでいく私たちの実践こそ、そのまま総じての生死一大事血脈なりとの、強く深い確信を持続して、新世紀をめざし凛々^{りんりや}しくわが道をスクラム組んでいこうと申し上げ、講義を終えさせていただきます。

（昭和五十二年四月「聖教新聞」掲載　ここでは総本山第六十六世日達上人御監修の改訂版を収録いたしました）